

地域交流センター通信 28

March 2017, Volume 28

都留文科大学地域交流研究センターとは？

地域交流研究センターでは、地域に根ざし地域と共同した活動を推進し、つぎのような取り組みをおこないます。

- 1) 地域交流に関するプロジェクトの推進
- 2) 学校の先生方などの教育相談
- 3) 地域のニーズに応えた貢献活動
- 4) さまざまな地域交流の連携の推進

領域をこえた地域交流の実践を創る



都留文科大学 地域交流センター通信 第28号 目次

発達援助部門

■地域教育相談室

第1回地域教育相談室公開講座「プラス思考の生徒指導への転換」
活気ある落ち着いた学校をつくるために……

「認める」指導への転換

都留市現職教員学級経営サポート

■地域特別支援教育

地域と協働するキャリア学習 「キャリアデザインワーク」の挑戦
クロボのフロアホッケーにかかわって

■地域美術教育

クロボアート活動と陶芸講座
クロボアート活動に参加して

都留市立谷村第二小学校 陶芸講座

暮らしと仕事部門

都留を流れる水の調べ方

同位体から見る都留市東桂地区の河川の水質について
— 私たちの生活活動と水質との相互作用 —

都留市の水環境 — 地下水学の基礎と東桂地区の水環境 —

フィールド・ミュージアム部門

■研究・教育活動

都留文科大学附属小学校の環境教育

■展示活動

都留文科大学フィールド・ミュージアム写真展「大学周辺と図書館ビオトープの四季」
企画展「あの頃の都留を歩く—写真・記憶・物語—」を終えて

富士急行線の駅舎での展示活動—まちなかの手作り博物館を目指して—

■地域を観察し、記録し、学び合う

地域の人々に寄り添う

はじめてのキャンパスツアー

オープンキャンパスのキャンパスツアーを担当して

■地域を観察し、記録し、学び合う

読み手からの視線に学ぶ読者交流会
生き生きとした姿に出会う観察会

糞さがしも大切な思い出

三浦 淳……………4

後藤志緒莉……………5

品田笑子……………6

逢坂佳希……………7

山口美奈子・且 知奈美……………8

小俣英彦……………10

磯崎えり奈……………12

内山美恵子……………14

内山美恵子……………15

小口尚良……………16

古屋知美……………17

森屋雅幸……………18

伊藤瑠依……………19

山内利奈……………20

平岡摩梨菜……………21

小泉篤広……………21

長尾 泉……………22

高橋未瑠来……………23

佐藤琢磨……………23

地域交流研究センターの教養科目

- 「地域交流研究Ⅰ」——目の前で起こっていることと社会の事情を結び付けて考えるにはどうすればよいか?—— 山口博史 24
- 「地域交流研究Ⅱ」——生きもの地図をつくる—— 西 教生 25
- 「地域交流研究Ⅲ」——山梨について広く知識を得て、それぞれの課題にとりくむために—— 山口博史 26
- 「地域交流研究Ⅳ」——地域を観察し、記録し、学び合う—— 北垣憲仁 27
- 感動を言葉にする授業—— 南條 新 27

地域交流研究教育プロジェクト

- 田んぼクラブ—稲作体験実習の取り組み— 西本勝美 28
- 活動の曲がり角を迎えて 柴田富士雄 28
- 十日市場湧水の年変動を捉えるために 内山美恵子 29
- 実際の経験を通じた学びの大切さ 田村弥咲 29
- 自分が知らない知識を得る面白さ 竹川貴裕 29
- 谷ニラボ 山森美穂 30
- 直径8cmと直径2mの地球・月・惑星 30
- 食育つる推進市民会議活動〜市民会議と大学の連携による学生主体の食育実践活動の試み〜 平 和香子・佐々木新樹・申 玄祉 31
- 地域の方々と共に歩む食育教室 31

トピックス

- 学級づくりの向上をめざす実践講座を振り返って 鶴田清司 32
- 文大名画座 『シラノ・ド・ベルジュラック』 山口博史 33
- 県民コミュニティカレッジ 「いきいきと幸せに生きるために…心理学のすすめ」 中川佳子 34
- 脳・ストレス・姿勢・コミュニケーションと心理学 野口哲也 35
- 市民公開講座 「日本文学から世界文学へ—夏目漱石と多和田葉子の鉄道小説を読む—」 35
- 子ども公開講座 35
- 留学生と遊ぼう 川口優佳・越川優花 36
- 森の動物の不思議 田中美佐緒・志村智子・竹田ふみ子 37
- 続ける力が心を紡ぐ〜都留文科大学合唱団復興支援クリスマスコンサート〜 37
- 「復興」という言葉を思う 清水雅彦 38
- 合唱の意義を考えた2日間 望月彩乃 39
- 合唱団宮城県訪問について—復興支援コンサートで得たもの— 川瀬咲衣花 40

地域交流センターサテライト

- 大学と地域の懸け橋として 袈岩亜紀 41
- 盛里地区での訪問演奏を終えて 滑川未来 41
- 「編む」を伝える難しさ 加藤明香 41

第12回地域交流研究フォーラム

- Q—Uを活用した学級支援及び学校支援のあり方 品川笑子 42

■地域教育相談室■

第1回地域教育相談室公開講座

「プラス思考の生徒指導への転換」

■品田笑子

平成28年5月20日（金）に、逗子市教育委員会教育部長で「参画型マネジメントで生徒指導が変わる」(図書文化)を三田地真美氏と共同執筆された石黒康夫先生（博士・教育学）を講師にお迎えして第1回公開講座を開催いたしました。石黒先生には校長として生徒指導困難校の立て直しに奔走した体験を交えながら、ポジティブな行動を認めていく「プラス思考の生徒指導」「スクールワイドPBS (School-wide Positive Behavior Support)」の有効性と必要性について語っていただきました。学生37名、教育関係者及び一般31名、合計68名の方が集まり、石黒先生の熱いメッセージに聴き入っていました。その参加者の中から2名の方に感想を書いていただきました。

(しなだ えみこ・本学COO推進機構特任教授)

活気ある落ち着いた学校をつくるために…

■三浦 淳

5月初旬、勤務する中学校の職員室の机の上に1枚のチラシが置いてありました。普段は忙しさのあまり、チラシに目を通すことがなかなかできませんが、「プラス思考の生徒指導への転換」というタイトルに目を引かれ、読んでみました。すると、叱る生徒指導は「従来の生徒指導」であり、「強い語調で注意して子どもに従わせる指導の典型」と書いてありました。私は、この言葉を見てハッとさせられました。これまでの自身の生徒指導を振り返ってみると、未然に問題行動を防止する取り組みや活動は積極的に行ってきたものの、事後指導はどうしても「叱る・諭す」が中心になっていたからです。

当日、会場の教室に到着すると、座席はほぼ満席で、学生さんのほか、地域の小中学校、高校に勤務する教職

員の姿が多数見られました。このことから、本講座の関心の高さがうかがえました。講師の石黒先生は、これまで複数の指導困難校での勤務を経験された先生で、問題行動の件数や壊された箇所の修繕費等を数値化し、その状況を説明しました。そして、今回提起された、スクールワイドPBSという手法を取り入れて以降、明らかに件数および修繕費ともに減少していることを示しました。また、指導を展開する上で、同一校において、指導対象となる児童生徒や、指導する教師により、指導内容や方法、程度などが異なる「ダブルスタンダード」は、児童生徒や保護者に不公平感が生まれ、ますます指導が困難になり荒れが生じると話されました。

スクールワイドPBSとは、「子どもの良いところ・

できているところを伸ばす」手法で、児童生徒の問題行動に着目するのではなく、いい行動とはどういう行動なのかを考えさせ、行動することで望ましい行動を増やしていくというものです。石黒先生はこれに「自分で考える」ことを加え、日本の学校教育用に改善しています。この方法を取り入れることで、児童生徒が自らルールを作り、行動していくことを通して、より行動が強化され、児童生徒と教師の関係性も高まるといいます。

今回の講話を聞き、改めて自身の指導を振り返るとともに、石黒先生が提示した日本版スクールワイドPBSの手法を取り入れ、児童生徒の行動を認める指導と行動の強化、グレイゾーンの児童生徒への働きかけを積極的に展開し、活気ある落ち着いた学校をめざしていきたいと思いを新たにしました。約2時間の講座でしたが、毎回学校現場において明日からの指導に役立つ内容で、大変ありがたく思っています。また、熱心に学ぶ学生のみなさんの姿にも刺激を受けました。ありがとうございました。

(みうら じゅん・都留市内公立中学校教諭)



講師の石黒先生

「認める」指導への転換

■ 後藤志緒莉

学校には、様々な思いを抱えた子どもたちがいます。将来教師になった際、適切な行動を取れない子どもに對して、対応の仕方を考えなければならぬ場面が必ずあるでしょう。「プラス思考の生徒指導」とはどのようなものを学び、自らの指導観の参考にしたいと思ひ、今回の講座に参加しました。

子どもの問題行動が減らない背景には、学校内で「指導のダブルスタンダード」が起きていることが考えられるそうです。教師の指導に差があれば、「あの先生は厳しいから、しっかりしよう」「あの先生は厳しくないから」と、子どもが判断するでしょうし、子どもや保護者からの信頼を失ってしまうことにも繋がります。そのような「指導のダブルスタンダード」をなくし、学校として一貫性のある指導を目指すことが必要なのだと実感しました。

今回のお話の中心であった「スクールワイドPBS」という方法は、「指導のダブルスタンダード」の改善と、子どもの問題行動を減少させるのに効果的な方法というものでした。「スクールワイドPBS」の基本的な考え方は、「子どもの良いところ・できているところを伸ばす」というものです。生徒指導というところ、問題を叱るだけの指導を思い浮かべますが、望ましくないことは望ましくないと指導をしながら、できた場合は褒めることが「スクールワイドPBS」では重要となります。褒められることによって、子どもは大人から「認められた」と実感します。大人から認められ

るということは、子どもにとって安心感や自己肯定感につながると思います。一人の「大人」として、そして「教師」として、望ましくないことは毅然とした指導をし、良いところは存分に褒める、そのような指導を目指していきたいと思ひました。

指導の基準を学校全体で統一するだけではなく、その基準に則って子どもとともに具体的な行動を考えるということも印象的でした。示されたルールを守るために、具体的にはどのような行動をすればよいのかを考えることで、子どもの中には自分たちで決めたことに対する責任感が生まれます。子どもが自らの行動を主体的に見つめ直し、自分たちの問題として関わっていくことが大切であるとわかりました。

子どもの問題行動を解決するには、教師個人の取り組みと学校全体での取り組みの二つが一貫性をもったものとして働かなければなりません。今回の石黒先生のお話を胸に、学校で子どもたちと向き合っていくたいと思ひます。

(こ)こ しょり・大学院文学研究科国文学専攻2年



第1回教育相談室公開講座の様子

都留市現職教員学級経営サポート

■ 品田笑子

今から6年前に都留市教育研修センターと地域教育相談室が連携した「現職教員メンタルヘルスサポート」事業が始まりました。原則として月2回（4月と8月を除く）木曜日午後に相談室で行う活動でした。3年前からは名称を「都留市現職教員学級経営サポート」に変更し、学校を訪問しての学習会講師や相談活動にもその守備範囲を広げ、一昨年から市担教員の先生方の授業サポートや児童生徒とのかわり方に関する相談にも取り組んでいます。

本年度はまず、恒例になっている都留市転入・新採用教員の学級経営講座を5月25日に実施しました。前半は学級集団育成の理論の講義、後半は構成的グループエンカウターの体験です。新しい職場や初めての仕事では悩みも生じ易く、人間関係もまだできていないため相談する人がおらず、メンタルヘルスの維持が難しいことが想定されます。しかし、相談室に相談依頼をしようにも担当者がどんな人間か分からない状況では抵抗があります。そこでこの講座で担当者の私を知ってもらうのが第一の目的です。また、構成的グループエンカウターのエクササイズを通じた参加者同士の交流は、同じ境遇の知り合いをつくり、孤立感解消につながるのではないかと考えています。

本年度の市担教員の先生方のサポートは5名延べ6回でした。自分自身が若い頃悩んだことや若手にもベテランにも共通する悩みに遭遇し、対応策を経

験豊富な都留市教育研修センターの先生と共に考えることは、私自身にとっても貴重な勉強の機会となっております。

その他に2校延べ3回の学習会講師を務めました。内容は、Q-Uという学級集団理解のための心理テストを活用した学級経営サポートでした。Q-Uについては、42・43ページに掲載されている第12回地域交流研究フォーラムの報告を参照してください。

これらのサポートは都留市教育研修センターか本相談室に電話で申し込むだけで面倒な事務手続きは必要ありません。担当者の私の守備範囲であれば内容は要相談です。毎年4月に都留市内の各校に配付する相談日等のお知らせを参考に、この事業を有効に活用していただけるとうれしい限りです。

（し）なだ えみこ・本学COC推進機構特任教授・

地域教育相談室担当



Q-U 結果を分析している様子



市内中学校での Q-U 学習会の様子

■地域特別支援教育■

地域と協働するキャリア学習

「キャリアデザインワーク」の挑戦

■逢坂佳希

地域特別支援教育分野では、昨年度に続き、今年度も地域の発達障害を有する

中学・高校生を対象にした3日間のキャリア学習活動「キャリアデザインワーク」

を実施しました。昨年度とは違い、運営委員会に新たにひばりが丘高校や、やまび

こ支援学校などの現職の先生方が加わったほか、介護・食品分野などの職場体験

先も増やしました。(昨年度の活動については、地域交流センター通信第27号11ページをご覧ください) (と思います)

私は2年間、運営委員として関わり、今年度は学生メンバーのリーダーを担当

しました。年々、この活動が拡大・充実し、地域にとつて意味のある活動になってき

ていることを実感しています。今年度は「社会人としての言葉の使い方」を中心

テーマに据えて実践を作ってきました。

1日目 (10月29日土曜日の午後)

導入学習として「日常生活における言葉を見直す」というワークを行いました。

ロールプレイを行うことで自分たちが使

う日常の言葉を理解していきました。

2日目 (11月12日土曜日)

各自、希望先の職場体験に行きました。

行先は、ブックスステーション、都留市曾^そ雌^しにんにく生産組合、不二家、ヘアースタジオスエヒロ、真心の里、なかのや

食堂でした。

3日目 (11月13日日曜日)

午前の活動では、それぞれの職場体験先での内容や学んだことを新聞にしま

とめ、発表しました。個性的な新聞ばかりでした。

午後の活動では、職場体験で言葉の使い方や学んだことを生かして、様々な場

面に応じた言葉を考えていきました。吹き出し入りの写真を用意して、そこに適

する言葉をロールプレイによって実践してい

いきグループで話し合いました。全体での共有を見ていく中で、職場体験の経

験が生きた内容になっていると感じるものでした。最後に、言葉の使い方宣言を

みんなで行いこれから生きていくうえで言葉をどのようにして使っていくか目標を定めました。

実践を通して、私たちの活動が、参加する子どもたちの将来を大きく左右する

ものになるかもしれないと思うと、重大な責任を感じるとともに、やりがいも感

じてきました。私は、小学校教員を目指していることもありこれまでの活動の経

験は今後にも必ず生きるものであると思っ

ています。実際、卒業論文も「キャリアデザインワーク」を題材に選びました。

ここまで現実に踏み込み、実感のある学びを得ることができたのは、この活動に

関わったからだと思います。なので、後輩たちにも、今後は是非参加してほしいで

す。そして、この活動が地域の理解を得て、障がいを持つ人たちが生きやすい社

会になればこんなうれしいことはありません。

(おおさか よしき・初等教育学科4年)



クロボのフロアホッケーにかかわって

■ 山口美奈子
■ 目 知奈美

クロスボーダープロジェクト（通称、クロボ）とは、都留文科大学での地域の知的・発達障がいのある子どもたちを対象にした週末活動とその保護者たちの「おしゃべりの場」づくりの試みです。今年度で3年目になりました。クロボの主な活動の1つにスポーツ活動があり、昨年度から、フロアホッケーに取り組んでいます。私たち2人は、学生メンバーとして、2年間かかわってきました。

フロアホッケーはスペシャルオリンピックス（障がい者スポーツを推進する団体）の競技の中で最も古い競技の一つで、アイスリンクのできない地域でもできるようとスペシャルオリンピックスがルールを独自に考案して生まれた公式スポーツ競技です。障がいの有無に関わらず体を動かすことの楽しさを知ってもらい、なおかつ地域の方々との交流も深められることも視野に入れ、活動を進めてきました。1年目はフロアホッケーに活動が定まるまでいくつかのスポーツに取り組んでいたため、自分たち自身のフロアホッケー技術・知識ともに吸収していくことで精いっぱいであった部分があったと振り返って思います。しかしながら、1年目にスペシャルオリンピックスの活動に参加したり、知識を蓄えていったことで、2年目に生かせることが多くありました。

今年の5月28日（土）には、都留文科大学で、ス

ペシャルオリンピックスのコーチクリニックが開催されました。このコーチクリニックは、フロアホッケーのコーチを育成する目的で行われ、フロアホッケー競技の内容やルールについて1時間の講義を受けたあと、練習環境のセットアップから、基本スキルと応用練習、コーチングの工夫と注意事項などを2時間実技の中で学びました。このコーチクリニックには、都留文科大学の学生以外にも、障がいのある子どもを持った保護者や、地域の人、性別や年齢問わず、多くの人が参加しました。短い時間ではありましたが、フロアホッケー競技について、楽しく学ぶことができました。私たち2人も参加し、フロアホッケーのコーチ資格を取得しました。

このコーチクリニックでの経験は、クロボにおけるフロアホッケーの活動にも生かされました。ただの参加者としてではなく、コーチとして、フロアホッケーの活動を取り仕切っていくうえで、場の運営をしたり、練習メニューを考えたり、参加者にバスやシュートの仕方やコツなどを教えたり、一つ一つの活動に責任を持って取り組むことができました。時折、時間の配分や、練習の進め方などで課題がみられ、スムーズに活動を進めていくことができないこともありました。こうした良い活動になるか、参加者に楽しいと思ってもらえるのか、常に試行錯誤しながら、活動をつくっていききました。その甲斐



もあつてか、活動を重ねていくごとに内容もより良いものになり、参加者にも楽しんでもらえる活動になったと思つています。

今年度の活動を改めて振り返ってみると、今年度のフロアホッケーには昨年度に比べ、さらに参加者が増え、より活動が活発になってきたことを感じます。人数が増えていくとより地域と子どもたちとの関係性ができ本来の目的へも貢献していつているのではとうれしく思います。そんな中でまた、最近では年齢層にも幅が出てきているので、より質の上がる練習ができる期待が持てます。その一方でそれぞれがそれぞれの力を十分に発揮しながら行える練習や内容が必要になってくるだろうとも考えています。何より、コーチを行つていてうれしいことは、参加者の方々が楽しそうにしている姿を見られることです。来年度は一人一人がスポーツを楽しんでいると感じてもらえるように個々のレベルアップを図つていつてほしいと期待しています。また、4年生が卒業し活動から抜けてしまうため、コーチの数も少なくなつてしまいます。来年度以降も1人でも多くの人にコーチになつてもらい、フロアホッケーの活動が続いていくように、そしてより良いものになるように、これからも活動を盛り上げていつてほしいと思つています。

(やまぐち みなこ・初等教育学科4年)
(かつ ちなみ・初等教育学科4年)



■地域美術教育■

地域美術教育分野から地域に発信する表現活動

クロボアート活動と陶芸講座

■鳥原正敏

これまで初等教育学科図工・美術教室は研究活動「たからばこ作戦」を柱に様々なかたちで地域の美術教育活動にかかわってきました。本年度はこれまで参加してきた地域特別支援教育分野のプログラム「クロボ」の活動の中でアート活動を企画・運営するなど、更に積極的に参加しました。具体的には、アート活動の成果として、参加してくれた子どもたちの作品写真を使ったポスターを制作したり、1号館ロビーで「クロボ×アート展」を開催したりしました。

また、今年も谷村第二小学校「陶芸講座」を開催しました。この講座は毎年ご好評をいただいています。本講座は学生が、本学の授業で学んだ知識や体験をもとに子どもたちに指導を行いながら学び、貴重な機会でもあります。

これらの活動には、多くの学生と図工・美術教室の先生方が参加しています。ここではご参加いただいた先生方と学生のコメントをご紹介します。

(とりはら まさとし・本学初等教育学科教員)

クロボアート活動に参加して

■小俣英彦

平成28年7月30日(土)に、都留文科大学構内において、特別なニーズを持つ子どもたちを対象にした週末の居場所づくりの活動である「クロボ」が開催され、午前はスポーツ活動でフロアホッケーを行い、午後はアート活動「ロボットを作ろう」を行いました。

この活動の中で、私は、アート活動に参加、高校生班を担当しました。この回での活動は「ロボットを作

ろう」と題して、様々な形の木材を自由に組み合わせ、グルーガンで接着、「木」のよさや美しさを味わいながら、制作を楽しむことがねらいでした。

少し専門的な話になりますが、この制作は、立体的なものを集め、積み上げる、貼り付ける、構成するといった「アッサンブラージュ」という技法で、偶発的な要素を「可能性」としてとらえることが出来ます。



「ロボットを作ろう」制作の様子

参加者は、こういった技法を理解し、木材の形をいろいろなものに見立て、偶発的にイメージを広げ、「公園」や「家」、「箱」など様々な作品作りを楽しんでいます。その結果、我々の予測や想像を超えた作品がたくさん出来上がったと思います。

一般的に、木を扱うには、どうしても「のこぎり」や「のみ」などの刃物がないと何もできないように考

えがちです。しかし、少し視点を変えて考え、工夫すること、刃物を使うことなく、だれもが木をつかって楽しく制作できることを、私自身も含め、参加者の皆さんと改めて確認、共有できました。

木には紙や粘土にはない魅力があります。工夫すれば、小学生でも十分、木をつかった制作ができると思います。子どもたちにも楽しみながら、木の持つ「よさや美しさ」をたくさん味わってほしいと思います。

私が担当した高校生班に加え、他の教室で制作していた小・中学生班でも、組み合わせにこだわったり、材料をどんどんつなげて大きな作品を作ったり、子どもたちがそれぞれ工夫しながら制作していました。木を組み立てることは「バランス」や「構造」など予測がつきにくいことが多く、うまくいかないこともたくさんあったと思います。しかし、子どもたちは我々が驚くような集中力を見せ、課題を見事に克服していました。

おわりの会で完成した作品を、誇らしげに示し、説明している子どもたちの様子がとても印象的でした。これからも子どもたちには、課題を乗り越え、自ら結果を求め、達成感を味わうことに挑戦してほしいと思います。

今回の活動では、木を使うため、これまでにない準備や気遣いが必要であったと思います。文末ではありませんが、準備や指導を担当された先生方や学生の皆さん、当日、子どもたちを見守ってくださったボランティアの方々を中心に御礼を申し上げます。

(おまた ひでひこ・本学初等教育学科非常勤講師)



おわりの会の様子



クロボ展会場風景

都留市立谷村第二小学校 陶芸講座

■磯崎えり奈

2016年10月22日(土)に、谷村第二小学校において体験学習会「陶芸講座」を行いました。この講座は谷村第二小学校に通う児童と保護者を対象とし、今年度の参加者は30名でした。当日は鳥原正敏教授、布山浩司特任准教授、私、図工・美術教室の2年生から4年生までの学生10名で指導にあたりました(指導者合計13名)。

子どもたちは、会場である体育館に入ってきたときは最初緊張しているように見えました。学生が声をかけ子どもたちとコミュニケーションをとりながら案内をし、それぞれの家族や友だちと一緒にグループで一席に席へ座ったことで、少し緊張がほぐれたようでした。

今回は最初どのような作品を制作するのかについて、布山先生が実際の様子を見せ、これと同時に私が口頭で説明しました。説明では子どもたちの様子を見ながら、作業工程の中で大事と思われるポイントをわかりやすくはつきりと言うことに留意しました。説明とともに、布山先生の手でカップの形が出来上がり、模様などの飾りつけを見せているときには、子どもたちはその後のできあがりを楽しみで、ワクワクする気持ちをおさえずれないようでした。最初に作品をどのように作っているのかを想像できない時点では不安の色が隠せませんでしたが、説明の後には、参加者には安心感とほどよい緊張感、そして、これから作るぞ!という気持ちがわき上がってきていました。

制作では、1グループに学生が2人ずつ担当として入っていたので、その学生が作品について相談しながら手順を工程ごとに説明しながら進めました。参加者は皆、

丁寧制作していました。保護者の方々も、最初は子どもたちの様子を見ながら進めているようでした。工程が進むにつれ、学生や講師とのコミュニケーションが徐々に活発になりました。作品が実際にできあがるにつれ、保護者もいつそう制作に集中し、こだわって作っている様子がうかがえました。作業工程は単純ですが、使いやすさや理想の形を目指して作ることで大人も子どもたち以上に楽しんでいる様子でした。

形が出来上がると、かわいらしい模様や自分のインディカルなどを、判子を使いながら飾り付けていました。中には取っ手をつける子どももいました。作品はカップという用途のあるものです。そのため、制作の工程が決まっている中でどのように自分の考えた好きなカップを作るかを考え、工夫しながら進めていたようでした。

この体験学習会は、陶芸を体験する児童や保護者の方々だけではなく、これからの社会で活躍していく学生たちの勉強と経験の場でもあります。学習会は、大学生が子どもたちやその周りにいる大人たちと直接触れあい、他人に伝えることを意識して実際の作品制作を経験する機会です。これは大学で学ぶ意欲を刺激し、大学の学びの意味、その後の進路や将来について考えるきっかけになり、そして今後の経験や知識になります。また、このことは学生だけでなく、私たち講師にも言えることです。私たちがまた時代と共に変わりゆく子どもたちを取り巻く環境を知り、子どもや保護者との制作経験を積み、体験会の今後のあり方について思考することが大切なのではないかと思えます。



制作の様子



会場の様子

以下、今回初めて参加した学生4人の感想をご紹介します。

(いそぎき えりな・本学非常勤講師)

八田 美咲 (初等教育学科 2年)

今までサークルなどで子どもたちと触れあったことはあるのですが、保護者の方も一緒に関わることはありませんでした。新鮮でした。実際に参加してみると、「どこまでアドバイスをしていいのか」と思うところがあり、教えることの難しさを感じました。陶芸教室をやってみて、図画工作で大切なことは、子どもたちの個性を尊重しながら一方的に「しなさい」と言うのではなく、その個性を伸ばしてあげるような手助けの必要性を意識しました。そのためには教育に関わる私たち自身が様々な可能性を考え、経験する必要があるのではないかと思います。陶芸講座は子どもも大人も集中して取り組むことができ、手で作ることの楽しさを共有できる良いきっかけになるのではないかと思います。

八巻 凌 (初等教育学科 2年)

陶芸教室が、いざ始めてみると子どもたちと一緒に楽しんでいて自分がいきました。今回の活動で一番の収穫は、子どもたちの安全に配慮しながら限られた時間の中で陶芸を通してコミュニケーションをとり楽しめたことでした。また、子どもたちが感性を精一杯はたらかせて作品を作り上げていく様子がとても面白く感じました。これらは自分自身を表現した作品で「私」という題名がぴったりのものでした。作品を見ているこちら側まで、思い込みに捉われないことなく自由な発想を感じるものばかりでした。

この活動を通して改めて子どもたちと触れ合うことの面白さを感じました。小学校教師が自分にとって天職だと思いました。今後、このようなプログラムがあったら、今回以上に「教師とは何か」を考えながら参加したいと思いました。

鈴木 大輔 (初等教育学科 2年)

私自身、陶芸の制作経験がまだまだ多いわけではない。そのため子どもたちに陶芸を教えることは不安が大きかった。しかし、いざ当日になり、子どもたちと保護者の方々と制作を進めていくなかで、徐々に不安な気持ちが消えていった。自分自身も一緒に楽しみながら制作のお手伝いをするのができたことが大きい。制作を通して子どもたちや保護者の方々の笑顔を見たり「ありがとう」と声をかけてもらったりするなかで、人と関わる仕事の面白さを実感することができ、将来について考える良い機会になった。陶芸教室に参加できたことはとても良い経験だった。またこのような機会があれば参加したいと思う。

菊田 百花 (初等教育学科 2年)

一番印象に残っているのは高校三年生の女の子の作品がすごくおしゃれだったことです。紅葉の模様をセンスよくつけていて、季節感もあって、「おしゃれだなあ」と思いました。私が主に見ていたグループは児童とお姉さんとお母さんが参加しており、年齢層が幅広く、色んな雰囲気のある作品を見ることができました。作品を試行錯誤しながらつくっていく様子を近くで感じられたことは勉強になりました。同じテーマで、使う材料も同じなのに、グループごとにより個性があつたことも面白かったです。



完成した作品

都留を流れる水の調べ方

2015年度より水をテーマに活動を始めた「暮らしと仕事部門」。都留文大生の皆さんに、都留市にお住いの皆さんに、私たちの暮らしと仕事を支える水に関心を持ってもらいたくて、研修会と公開講座を行いました。その様子をご紹介します。

■ 内山美恵子
■ 福島万紀

(うちやま みえこ・本学COC推進機構特任教授)
(ふくしま まき・本学社会学科環境・コミュニティ創造専攻教員)

暮らしと仕事部門研修会

同位体から見る都留市東桂地区の河川の水質について — 私たちの生活活動と水質との相互作用 —

■ 内山美恵子

都留市の中心を流れる桂川（相模川）に、私たちの生活はどのような影響を与えているのでしょうか。10月27日、目では見えない「同位体」という物質をツールとして環境中の水の挙動を研究しておられる、山梨大学国際流域環境研究センターの中村高志先生に講演をしていただきました。参加者は22名、そのうち大学生は7名でした。同位体とは同じ性質を持った質量（重さ）の違う原子のことですが、これら質量の違う原子が材料となることで、同じ物質でも重い物質と軽い物質ができます。例えば水は水素原子と酸素原子が結合したのですが、重い水素原子と酸素原子から出来たものは重い水、軽い原子から出来たものは軽い水になります。雨は高い標高で降った雨ほど軽い水の含まれる割合が多くなる傾向にあることがわかっているのです、麓の湧水で重い・軽い水の割合を調べると、どのあたりに降った雨が湧水しているのかを推定することができる、ということでした。桂川の上流部に

あたる忍野八海の水を調べた結果、富士山の中腹に降った雨が湧水していることがわかった、とのことでした。また、窒素（含む）由来か植物由来か、が推定できます。調べたところ、人口の多い富士吉田周辺では動物由来の、都留周辺では植物由来の窒素が多い傾向にある結果となったそうです。幸い都留では、上流域に比べると私たちの生活の影響は強く出ていませんでしたが、川は上流から下流へつながっているのです、自治体単位ではなく流域全体で水の管理や保全を考えていく必要がある、というのが中村先生の主張でした。難しい内容にも関わらずわかり易く平易な言葉で説明して下さった中村先生のお話にも、地域交流研究センター交流スペースのアウトホームな雰囲気も手伝って、参加者からはたくさん質問が出ました。それぞれの質問に丁寧に答えていただき、とても充実した研修会となりました。

(うちやま みえこ・本学COC推進機構特任教授)



学生の質問にホワイトボードを使って丁寧に答えてくださる中村先生



地域交流研究センター交流スペースでの研修会の様子

暮らしと仕事部門主催・郡内地方研究会共催市民公開講座

都留市の水環境

—地下水学の基礎と東桂地区の水環境—

■内山美恵子

太古の昔から、都留市東桂地区では湧水の恵みを受けて暮らしてきました。数多く湧き出す湧水は環境省より平成名水百選の一つに選定され、今も人々に親しまれています。この湧水を将来にわたって保全するために、地下水についての基礎知識を身に付けていただきたい、という目的で、12月7日・14日の2回にわたって市民公開講座を行いました。当日は環境に興味を持ってもらえる市民や公務員、都留文大の方たちが第1回13名、第2回11名、集まって下さいました。場所が自然科学棟6階の実験室ということで、学生時代の実験室を思い出し、懐かしんだ方もおられたようです。講座の内容は、第1回は「地下で水はどのように流れているか」と題して、地下水が重力と圧力とに支配されて流れていることや、地層の中を流れるときに地層中のミネラルなどが溶けだして地域特有の水質になることなどをお話しました。第2回は「都留市東桂地区の地層の分布と湧水のはなし」と題して、東桂地区には山地を作っている古い時代に海底で堆積した地層や富士山が噴火した時に流れてきた溶岩が分布していること、湧水している地下水は溶岩の中を流れていることをお話

しました。最後に、昨年から十日市場で観測している湧水の観測結果の一部を紹介しました。第1回の講座の途中で、市販のフランスの水、白州町の水、富士宮の水、そして汲みだての十日市場の水を飲み比べる利き水大会をしました。2名の方がすべての水の味を利き当てられ、舌の繊細さに驚きました。そのうちのお一人にミネラル成分が全く入っていない水も味わっていただいたところ、「果てしなく平坦な味」とのことでした。来場者のアンケートをみると、湧水の面白さや都留の水の豊かさを感じていただけようです。今後、また、部門の研究活動を通じ新しく分かってくれたことを、市民の皆さんにお知らせしていく予定です。

(うちやま みえこ・本学COC推進機構特任教授)



自然科学棟地学実験室での講演会の様子（第2回講座）



真剣に水の味を判別する参加者（第1回講座）

注：写真はすべて、地域交流研究センターブログに掲載されたものを使用しました。ブログも併せてご覧ください。(http://tsuruunv.sakura.ne.jp/subject/chiikikouryu/)

■研究・教育活動■

フィールド・ミュージアム部門では、大学での研究の成果を教育に活かす取り組みをしています。ここでは、都留文科大附属小学校で行った授業を紹介します。

都留文科大附属小学校の環境教育

■小口尚良

本校は、校舎と森が隣接し、窓から四季折々の森の景色、ムササビ、リス、ヒミズ、様々な野鳥を見ることができるといふ自然環境に恵まれた学校です。学校林も保有しており、これらを活用して1年生から6年生まで体系的な環境教育を行っています。

平成28年度の活動

- 1年生・学校林散策、ネイチャーゲーム等
- 2年生・ふれあいの森散策、ネイチャーゲーム等
- 3年生・学校林散策、森の生き物調べ
- 4年生・ふれあいの森での動物観察、クルミ拾い、野鳥の巣箱作り、ふれあいの森観察スペースの整備
- 5年生・学校林で林業体験（枝打ち・間伐）薪運び椎茸植菌
- 6年生・学校林で植樹、下草刈り、縦割り班、ふれあいの森観察スペースでの餌付け（リス、野ねずみ、ヒミズ）

低学年では、都留文科大の北垣憲仁先生、県ネイチャーゲーム協会の方を講師に招き、自然体験学習を中

心に進めています。3年生は学校林で、北垣先生を講師に、動植物について実物を通して学びました。出会うことが難しい野生動物については、食痕や糞、足跡などのフィールドサインを通してその存在と暮らしぶりの一端について学びました。4年生は、北垣先生の指導の下、リスや野ねずみ、ムササビ、野鳥など身近な野生動物の暮らしやつきあい方を学びました。自分たちで作った出合いの場所に訪れるネズミ、リス、ヒミズ、モグラを直接または映像を通して観察することが出来ました。2階ホールでテレビ中継することにより、他学年の児童も観察することが出来ました。高学年は、里山での自然と人とのつながりを、林業体験学習で学びました。5年生は椎茸植菌、枝打ち・間伐作業を、6年生は植樹・下草刈りを、森林組合の指導の下、学校林や学校の裏山で行いました。ふれあいの森観察スペースでの餌付けは今年度も児童会の縦割り班で行いました。自分たちが置いた木の実やひまわりの種子を食べに来るリスや野鳥を、校舎の窓から観察することができました。

恵まれた自然環境の中で多くの方々のご支援をいただき今年度も充実した自然体験活動ができました。

（おぐち ひさよし・都留文科大附属小学校教諭）



ふれあいの森観察スペースにやってきたニホンリス



野外でモグラのトンネルを探す

■ 展示活動 ■

わたしたちの活動の成果を多くのかたがたと共有するために、フィールド・ミュージアム部門では市立図書館やミュージアム都留、富士急行と連携した展示活動に取り組んでいます。

市立図書館・都留文科大 交流事業

「都留文科大フィールド・ミュージアム写真展

大学周辺と図書館ビオトープの四季」

2016年11月1日（火）～12月28日（水） 都留市立図書館 2階閲覧室

【企画】 都留市立図書館、都留文科大フィールド・ミュージアム

■ 古屋知美

都留市立図書館では、昨年から市民の文芸作品や写真・絵画などを紹介する「市民の作品展示」を行なっています。これは、生涯学習の成果発表の場として図書館を使っていたことで、学習意欲のいっそうの向上をはかり、地域の学びを支えるという図書館の役割を果たそうとするものです。読書活動以外でもより多くのかたがたに図書館を活用していただきたいと、市民の協力を得て開催しています。

このような市民や地域との協働で行う取組のなかでも特に、都留文科大との連携は当館の特色となっており、これまで都留文科大フィールド・ミュージアムとの協力・共催等により、さまざまな企画を実施し、その様子を『地域交流センター通信』に記録してきました。

今回は、これまでフィールド・ミュージアムが年月をかけ記録してきた、都留市の動植物等の写真（32枚）

をパネルにし、「大学周辺の自然・生物」「大学附属図書館ビオトープ」「都留市の自然・生物」の3つのテーマに区分し展示しました。全てのパネルにキャプションが添えられ、写真だけでは伝えきれない背景を伝えることができました。大学附属図書館の「存在を初めて知るかたがたもいらつしゃいました。その場所では現在新しい建物の建設工事が進んでいるとききます。完成後はこれまでのビオトープは違った、新たな空間・環境に、新たな生態系が生まれる事を期待しています。」

会期中に実施した観覧者アンケートの感想からは身近な動植物等に対する関心の高さがうかがえ、地域の自然や生きものとの共生を考える、という展示テーマのねらい通り環境への関心を誘った展示となりました。関連図書のほか、『フィールド・ノート』『地域交流センター通信』の最新号とバックナンバーを共に展



示し、都留大との交流事業やフィールド・ミュージアムの活動をPRする場を設けたことで、多くのかたがたに大学をより身近に感じていただく機会となり、大学と市民の新しい交流が生まれたと思います。

最後になりましたが、パネル製作全般を担当してくださいましたフィールド・ミュージアムの学生の皆さん、また何度も打ち合わせを重ね、時間をかけて取り組んでいただいた北垣憲仁特任教授にもこの場をお借りして感謝申し上げます。

（ふるや ともみ・都留市立図書館司書）

企画展「あの頃の都留を歩く —写真・記憶・物語—」を終えて

■ 森屋雅幸

本誌にて度々紹介させていただいておりますように、都留文科大地域交流研究センターとミュージアム都留では、市内の写真とそれにまつわる記憶を収集と保存を行う「わたしとあなたの都留アルバム」事業を進め、現在までに2000点以上の写真を収集することができました。

また、これまで事業の成果を市民の方々にお知らせしようと、平成26年3月22日から5月6日にかけてミュージアム都留にて企画展「写真が伝える都留の思い出—未来へ贈る地域の記憶—」を開催し、翌年の平成27年3月20日から5月6日にかけては「写真でたどる都留の時代—未来へつなぐ地域の記憶—」を開催しました。また、平成27年にはこれまで収集した写真をアルバム化した『わたしとあなたの都留アルバムコレクション①』と「写真が伝える都留の思い出」展の図録を刊行して事業成果の普及に努めました。事業にご協力、また写真をご提供いただきました方におかれましては、この場をお借りして御礼申し上げます。

平成28年4月16日から6月12日には「あの頃の都留を歩く—写真・記憶・物語—」というタイトルで、高度経済成長期を経て変化した風景や人々の生活に関係した写真の展示会を行いました。この企画展の第3章「宝鉱山の風景を歩く」では都留文科大学生の学芸員資格講座を受講する有志の学生の皆さんと一緒に宝鉱

山の現地調査と文献調査、そして展示も行いました。こうした取り組みは、ミュージアム都留では初めての試みでしたが、新聞報道や複数の来館者から「調査を継続してもらいたい」という声をいただくなど、大きな反響がありました。また、平成28年4月30日に実施した関連イベント「写真の中の都留を歩く」では、当日は谷村地区を中心に参加者の皆さんと古写真と現地を比較しながら散策し、案内は都留文科大のフィールド・ノート編集部の学生の皆さんにご協力をいただきました。このように今回の企画展では、調査・展示そして普及に至るまで学生の皆さんの協力のおかげで充実した企画構成となりました。今後ともこうした学生の皆さんをはじめとした市民の方々の参加型展示に取り組んでまいりたいと思います。

なお、こちらの企画展の図録は平成29年3月末に刊行しますので、展示をご覧になれなかった方はぜひご一読いただければと思います。

(もりや まさゆき・都留市教育委員会
生涯学習課 文化振興担当)



「写真の中の都留を歩く」の様子



第3章「宝鉱山の風景を歩く」の
展示パネル作成の様子

富士急行線の駅舎での展示活動

—まちなかの手作り博物館を目指して—

■伊藤瑠依

わたしたち『フィールド・ノート』編集部は、富士急行線都留文科大学前駅の待合室をお借りして、フィールド・ミュージアム部門の活動を伝える展示をしてきました。駅は多くの人に展示を見てもらい、活動を知ってもらおうチャンスです。今まで以上に生かしたいと考え、今年度からは力を入れて展示をつくっています。

今回の駅の展示テーマは「古写真を手に、まちへ」です。これは『フィールド・ノート』88号で特集したテーマでもあります。これまで文章や写真で伝えていたことを、今度は展示という形でお伝えしたいと考え、駅の展示と『フィールド・ノート』本誌を関連させることにしました。

この特集でわたしたちは、古写真に写る場所へ足を運び、当時の写真と同じアングルで現在の景色を撮影しました。すると、山の形は変わらないのに、あたりの風景がまるでちがうといった驚きを体験することができました。このような変化を感じてもらえるよう、駅の展示でも古写真と現在の写真を比較したパネルを展示しています。また、古写真のなかには馬が写る写真もあったので、蹄鉄の跡を模したものを駅の床に貼っています。本物の古い蹄鉄は本学4号館で見られます。駅をきっかけに大学にも足を運んでくれる人がいたらいいと思います。

待合室に立ち寄ると、親子がベンチに座りながら展

示に目を向けていたり、高校生が説明のパネルを読んでいるようすを目にしたりしました。どんな感想を持つのだろうと気になって、そのようすをこっそり横目で見てしまいます。自分が体験した都留でのおもしろいできごとが、展示を通して誰かと共有できていたらうれしいです。

現在は89号、90号で特集した「うら山博物館」をテーマに展示を作成中です。まちなかにある手作りの博物館です。たくさんの方が気軽にしゃべったり、展示物に触ったりと、肩肘はらずに楽しめる博物館にできればと思っています。駅にお立ち寄りのさいはぜひごらんになってください。

(いとう るい・社会学科
環境・コミュニケーション創造専攻
4年)



展示を案内するポスター



駅舎内の展示風景

■ 地域を観察し、記録し、学び合う ■

わたしたちは、地域の自然や人びとの暮らしの知恵に学ぶことが大切だと考えています。学生みずから地域の自然や文化、人びとの暮らしを取材し、編集する『フィールド・ノート』もその取り組みの一つです。なお、この『フィールド・ノート』は、本学のホームページでもご覧になれます。ここでは、『フィールド・ノート』の一年を振り返りました。また、オープンキャンパスの「キャンパスツアー」についても、担当した編集部の子生に感想を記していただきました。

地域の人人々に寄り添う

■ 山内利奈

今年も『フィールド・ノート』では、都留を拠点としたフィールドに足を運び、身近な自然や地域の文化を観察し、記録していきました。

平成28年7月に発行した89号、9月に発行した90号では、2号にわたり生きものや自然と出会い学ぶことができるうら山を「うら山博物館」と名付け、特集していきました。89号では本学近くのうら山に焦点を当て、いつも暮らしているまちのようすとはまったく違った場所でそれぞれが面白いと思うものを見つけました。その見かたしだいでは、博物館にできるといふ発見があったのです。90号ではうら山からもう少し身近な場所へ出かけ、自分の目で見たからこそできる発見をしました。何気なく見ていた場所にも何か発見があるかもしれない。そんな気持ちでまわりを見ると、日々の生活はより楽しさを増します。

平成29年1月に発行した91号では、本学から少し離れた「朝日曾雌」という地域について特集しました。見たことも行ったこともない地域を訪ねたことで、私たちの頭のなかの地図は鮮明になり、都留市の新しい

一面を知ることができました。

私はこれらの特集は担当しませんでした。90号と91号で三浦養蜂園の三浦正朗さんにお話をうかがい、連載というかたちで記事を書かせていただきました。そのときに印象に残ったのは、三浦さんの自然の愛しかたについてです。私たちの好みに合わせず、自然や生きものが本来の力を発揮できるように、自分の環境の見かたを変えることが大切だと学びました。この考えを学んだとき、私たちの活動にも同じようなことがいえるのではないかと思いました。自分の眺めたいように対象を見つめるのではなく、地域の人々の暮らしかたや考えかたに寄り添い、理解するように努力する。そうしているうちに当たり前で気づきにくかったことがわかってくるかもしれません。これからも現地に足を運び、日常を新たに捉えなおしていきたいと思います。

(やまうち りな・社会学科

環境・コミュニケーション創造専攻2年)



私が取材した三浦さんのお宅の庭の様子



左から、『フィールド・ノート』89号、90号、91号

はじめてのキャンパスツアー

■平岡摩梨菜

2016年7月16日・17日に行われた本学オープンキャンパスのうち、私は16日にキャンパスツアーのキャンパスガイドとして参加しました。良く晴れていてとても暑い一日でした。

キャンパスツアーは午前1回、午後2回をガイド二人一組で回りました。一回の参加人数はまちまちでしたが、多い時で約30名を案内しました。親子で参加されるかた

も多く、特に保護者のかたには「病院は近くにありませんか」といった質問をいただきました。

私は一年生で入ってまだ半年もたっていない状況だったので、大学について知らないことも多かったです。そのため、具体的にお答えすることはできませんでした。また周囲にどんなお店があるかなどの、生活環境に関する質問にも苦労しました。です

が、私たちの話をわくわくしながら聞いてくれるようすは、見ていてとても嬉しかったです。

来年は、この大学に通った一年間で自分の感じたことや、学んだことなどを織り交ぜながら、参加者の皆さんによりキャンパスライフを具体的に想像できるように伝えていけたらと思います。一人暮らしする学生も多いので、保護者の皆さんの心配事も取り除けるように対応していきたいです。

(ひらおか まりな・社会学科現代社会専攻1年)

オープンキャンパスの キャンパスツアーを担当して

■小泉篤広

2016年10月10日、私は秋季オープンキャンパス中にキャンパスツアーの案内役を務めました。多いときで40名くらいの高校生を担当しました。キャンパスツアーは3号館から出発して、本部棟、

明内容も臨機応変に変えるようにしました。例えば、社会学科志望の参加者がいた場合は、利用する2号館の説明を自分のわかる範囲で説明しました。

コミュニケーションホール、自然科学棟、美術研究棟、大学生協、4号館、2号館、1号館、大学グラウンド、附属図書館という順番で学内を案内し、それぞれの建物はどんなときに利用することが多いか、どの学科の学生が利用することが多いかということなどを参加者に説明する約1時間のツアーです。

参加された皆さんの反応として、「都留の冬は寒いのですか」といった質問がありました。このほかにも、どんなことを大学でしたいかということ話してくれ、こちらとしても楽しく案内をさせていただけました。次のオープンキャンパスでも案内役をぜひ務めたいと思います。

参加者の人数や志望学科に合わせて説

(いづみあきひろ)

社会学科現代社会専攻1年



キャンパスツアー受付の様子。
ツアーには多くの高校生が参加してくれました



4号館1階の地域交流研究センターも案内しました

■地域を観察し、記録し、学び合う■

わたしたちは、地域の自然や人びとの暮らしの知恵に学ぶことを大切にしたいと考えています。学生自ら地域の自然や文化、人びとの暮らしを取材し、編集する『フィールド・ノート』やムササビ観察会もその取り組みの一つです。なお、『フィールド・ノート』は、本学のホームページでもご覧になれます。

読み手からの視線に学ぶ読者交流会

■長尾 泉

2016年11月7日に『フィールド・ノート』の読者交流会を開催しました。今回は7人の都留市民のかたが参加してくださいました。交流会前半では、編集部員3名が『フィールド・ノート』90号で書いた記事をスクリーンで発表しました。記事を書いていて、どんなことを感じ、読者のかたに何を伝えたいのか、短い発表のなかでまとめました。

後半では、いくつかのグループに分かれてお話をしました。そのなかで、冊子全体への意見や感想、都留市に住んでいるかたならではの情報をたくさんお聞きすることができました。昔は家畜がいる家が多かったので、小さい頃から馬の扱いを知っていたというお話や、家の近くの川に沿って渡り鳥が渡っていくといったお話など、わたしたちが知らなかった都留をたくさん教えていただきました。実際に体験しているかたの話とあつて、具体的に聞いていてまったく飽きないものです。今後取材に行ってもっと詳しく知りたくなりました。市民のかたが教えてくださる話はどれも、ずっとこの場所で暮らしていないければ知りえないものです。読者交流会では、

そういったお話や情報を実際に住んでいるかたの口から直接お聞きすることができました。

また、冊子に対しても、どうすればもっと読みやすくなるのか、どんなことが載っていたら手に取りたくなるのかについて意見を交わし、アドバイスを励ましの言葉をいただきました。その結果、取材したお店の場所がわかるように書くことや、読者の目を引く上で写真はとも大切だということを実感しました。

今回の交流会では、読み手としての冊子への視線を教えることができました。読者のかたからいただく言葉は、記事を書いていく上でこれ以上ない励みになります。読んでくださっているかたがいて、ということとは本当にありがたいことだと、あらためて感じることができました。今回の読者交流会で得たことを精一杯生かして、読者のかた、協力してくださる地域のかたにお返しする気持ちで、今後の冊子作りに取り組んでいきたいと思えます。

ながお いずみ・初等教育学科3年



記事で掲載した写真について詳しく解説しました



読者のかたと編集部員の学生が5つのグループに分かれて感想などを語り合いました

生き生きとした姿に出会う観察会

■高橋未瑠来

フィールド・ミュージアムでは一般のかたがたを招いたムササビ観察会を行っています。今年は新しい試みとして、今宮神社までの道のりをバスを借りて移動しました。バスのなかでは模造の原寸大ムササビを使った生態の解説などをおこないました。初めての挑戦でしたが、参加されたみなさんには楽しんでいただけたと感じます。

今宮神社では、たくさんの方々が絶えず続けて滑空することができました。滑空したムササビの数は5、6頭ほどです。参加されたか

たがたはムササビが空を飛ぶたびに「おお」と感嘆の声をあげていました。今回の観察会ではムササビと私たちとの距離の近さが見どころだったと感じています。滑空したムササビが降り立った木が、私たちから10メートルに満たない距離だった瞬間もありました。大木の側面にべたりとくっついてこちらを見つめるムササビに、参加者のみなさんは釘付けになっていました。

(たかはし みるく・社会学科現代社会専攻3年)

ふん 糞さがしも大切な思い出

■佐藤琢磨

私はツアーでムササビの糞について説明しました。都留市にやってきて一年目で、ムササビに出会ったのはほんの数度しかありませんでした。そんな私にツアーのガイドが務まるのか不安でした。

「ムササビは木から木へ飛び移ったあとに糞をします。だから木の根元ではたくさん糞が見つかります」とガイドを始めました。そして実際にツアーの参加者と糞を探してみます。正直、参加した人たちが糞さがしに興味を持っていただけのか心配でした。けれど、一度糞さがしが始まると、「あった!」「これかなあ」などと声が高鳴ります。「持ち帰り

たい人は袋ありますよ」と声をかけてみると、ほとんどの人が欲しいと言いい、大人気でした。私の緊張もいつの間にかほぐれていました。

もし室内でただムササビの糞を見せたとしても、持ち帰る人はほとんどいないはずですが、けれど自分の足で行き、自分の目でムササビを見たことで糞一つにも興味湧いて、大切な思い出になります。私もその思い出作りに携われてよかったです。

(さとう たくま・社会学科)

環境・コミュニケーション創造専攻1年



ムササビの糞が落ちている場所を解説しました



ムササビの生態にかんするミニ講座をおこないました

地域交流研究センターでは、「地域交流研究Ⅰ」、「地域交流研究Ⅱ」、「地域交流研究Ⅲ」、「地域交流研究Ⅳ」という教養科目を開講しています。今年度の授業を振り返ります。

「地域交流研究Ⅰ」

「目の前で起こっていることと
社会の事情を結び付けて考える
にはどうすればよいか？」

■ 山口博史

ある場所に住んでいると、さまざまなことが起こります。とくに気をつけなければ、ひとつひとつのことはそれぞれ関係がないようにもみえます。しかし、そこで生じることにはその地域共通のまた他の場所にも通ずる背景があることも少なくはないものです。地域交流研究Ⅰの講義は、その共通の背景を見通し、地域での交流を行なうにあたって有用な道具立てについて理解することをねらいとしています。そして、より学習を発展させることで、遠く離れた地域であっても共通の要素をみいだすことにもつながりえます。ひとつの事例について深く考えをめぐらすことで、そして他地域の事例と比較を行なう道具を得ることで、多くのことを学ぶことができるのです。

今年度は、昨年度の内容を踏襲した部分（「コミュニティ」、「住民」、「市民」、「まちづくり」、「自治会・町内会」、「NPO」、「無尽（むじん）（頼母子講、あるいはrotating credit association）」、「ネットワーク」など、地域交流について深く考えるために有用な概念の解説、また社会環境・地域

環境からふだんの暮らしのことを考えるなど）と新たに導入した内容がありました。

新たに導入した内容のひとつは、平成26（2014）年に都留市をはじめ山梨県とその周辺地域で観測された大雪のことについてでした。大雪という自然現象のように思われます。もちろん、雪が降ること自体は自然現象です。しかし、雪による被害がどのように顕在化するかというのはその土地その土地の個別の事情によることも少なくありません。講義では、まずとくに自然現象という面から平成26（2014）年の大雪について簡単な解説を行ないました。それをふまえて、これまでの講師のフィールドワークで収集したデータをもとに、この地方の地域特性について述べました。そして、大雪がこの地方に住む人にどのようなとらえられたのか、都留市住民を中心として当時の経験談を紹介しました。

自然現象が地域の特性を介してどのように住民の暮らしに影響を与えるのか、ひとつの事例を通じた学習の扉になつたのではないかと思います。講義であつたのは都留を中心とした事例なのですが、学問的な考え方や概念を導入することで、他地域の事例との比較につながるきっかけとなつたのではないのでしょうか。大雪にかんするフィールドワークは現在なお継続中です。来年度以降の講義ではフィールドワークの成果をさらにもりこめるようにしていきたいと考えています。

（やまぐち ひろし・本学COE推進機構教員）

各地の「水」



都留市十日市場の湧水

水の都ブルッヘ（ベルギー）

醒ヶ井宿（滋賀県）の湧水



「地域交流研究Ⅱ」

—生きものの地図をつくる—

■西 教生

ツバメとカエルから見た 都留の水田

地域交流研究Ⅱでは、2016年も大学とその周辺において、ツバメとイワツバメ、ハルゼミ、カエル類の調査をおこない、その結果を「生きものの地図」にまとめました。また、今年初めての取り組みとして、キビタキ用の巣箱を2個、ムササビの森に設置しました。

ツバメとイワツバメは、繁殖中の巣の数の変動は同調していました。ツバメの巣の数は2015年よりもやや増加しており、営巣場所は少し違っていましたが、イワツバメの巣の数は2015年と比べて大きな違いはないものの、営巣場所は少し異なっていました。営巣場所が年によって変わるの、建物の新築や取り壊しなどの人間活動の影響によるものかもしれません。

ハルゼミとカエル類の調査は2015年から実施しています。アカマツの枯死は山梨県内の多くの山で見られますが、ハルゼミの調査はその影響を評価するためのものです。大学周辺のハルゼミの分布は、2015年とあまり変わりませんでした。アカマツの枯死は現在も進行中であるため、今後も継続して調査をする予定です。カエル類は、絶滅危惧種と水田環境

の関係に注目して調査をおこなっています。アマガエルとトノサマガエルの出現場所は、2015年の結果とほとんど同じでした。つまり、水田環境は2015年とあまり変わっていないものと思われま

す。受講生からは、生きものの調査が楽しかった、これまでは気づかなかった都留市の自然に目が向くようになったという感想が聞かれました。身の回りの自然環境に関心を持つことは、たとえば環境問題を考える上で重要になってきます。また、水田は人間の食生活の基盤でもあります。水田を取り巻く生態系は、ツバメやカエル類を通してよく見えてきます。身近にいる生きものの調査には、私たちの生活を見直すヒントが隠されているでしょう。このような調査は、長期間継続しておこなわないと傾向が掴めません。2017年も引き続き、水田環境に焦点を当てながら身の回りの生きものの記録を取りたいと思っています。

(にし のりお・本学非常勤講師)



野外調査で設置した巣箱

「地域交流研究Ⅲ」

—山梨について広く知識を得て、それぞれの課題にとりくむために—

■山口博史

地域交流研究Ⅲの講義では、しばしば外部講師から「山梨出身の人はどれくらいいるか」について拳手を求められることがあります。講義をしてくださっている講師の方々は、文大で学ぶ学生には県内出身者が必ずしも多くないことをその機会にあらためて認識されるようです。この講義は山梨県とタイアップして実施（やまなし観光カレッジ）しているのですが、山梨のことについて県外出身者が広く知識を得るための、また山梨県出身者も出身地についてみなおすための大変よい機会になっているものと思います。講義ではそうした外部講師（山梨県の事物にかんする専門家をお招きしています）による講義のほか、バスに乗って各地を回るフィールドワークを行ないます。

山梨県の観光について講義とフィールドワークで学んだこと、気づいたことを県にレポートとして提出すること、また講義・フィールドワークを通じて学生各自が見出した研究課題を深める糸口を見いだせるようなきっかけの提供を行なっています。各講義のあとにリアクションペーパーの提出を求め、そのリアクションペーパーについての講評を山口が担当することで受講学生の問題意識を深めるための手助けを行なうようにしています。

今年度の講義とフィールドワークは下記のような内容でした。来年度以降も受講者の主体的な学習のきっかけとなるよう、工夫をしていきたいと考えています。

外部講師による講義

- | | |
|--------|--|
| 10月11日 | 開講式、山梨県の概要と観光振興
山梨県観光部職員 |
| 10月18日 | 山梨の歴史 帝京大学大学院
萩原三雄（山梨県立考古博物館） |
| 10月25日 | 山梨と富士山 山梨県観光部観光資源課
中島紫穂（富士山レンジャー） |
| 11月1日 | 地域活性 ゲストハウス
Hotel & Salon SARUYA 赤松智志 |
| 11月8日 | 郡内織物の新しい挑戦
株式会社前田源商店 前田市郎 |
| 11月15日 | 都留市の魅力
都留市 産業・建設部産業課 飯島知也 |
| 11月22日 | 甲州印伝
株式会社印傳屋上原勇七 上原勇七 |
| 11月29日 | 山梨のワイン 長谷部酒店 勝沼食堂
Papalotte 長谷部賢 |
| 12月6日 | 山梨の鉄道 富士急行株式会社 石井謙一 |
| 12月13日 | 山梨の方言 Can you speak 甲州弁？
五緒川津平太 |
- フィールドワーク**
- | | |
|--------|---|
| 11月19日 | （国中方面） シャトー勝沼、釈迦堂遺跡博物館、笛吹川フルーツ公園、山梨県立博物館 |
| 12月3日 | （郡内方面） 猿橋・猿橋溶岩、尾県郷土資料館、県立リニア見学センター、河口浅間神社、河口湖大石公園 |
- （やまぐち ひろし・本学COO推進機構教員）



山梨県立博物館



尾県郷土資料館

「地域交流研究Ⅳ」

— 地域を観察し、記録し、
学び合う —

■北垣憲仁

地域交流研究Ⅳの授業では、学生みずから地域に出て、自然や人の暮らしを観察し、記事にまとめ、冊子を編集しました。受講した学生に感想を記していただきました。

(きたがき けんじ・COC推進機構特任教授)



授業で編集した記事

— 感動を言葉に

する授業 —

■南條 新

この講義を受けたきっかけは、環境ESDプログラム授業であったことと、地域の人にインタビューを試みたかったことです。半期を通して編集について学びました。

記事を書くための第一歩は地域に出てネタを集めることからでした。この講義で私は、都留市上谷にお住まいのご夫婦と知り合いました。それまで民家をうかがって話を聞く機会はありませんでしたが、今回は思い切って、見ず知らずのお宅を訪ねてみました。

お二人からは家についての歴史・言い伝えなどについて教えていただきました。あげてもらった炬燵の部屋で話をしていると、実家のような居心地の良さを感じて、初めてのお宅なのに落ち着きます。都留にはこんなに暖かい家があったのかと、取材に出かけて気がつきました。記事を作るために地域に出ることが、地域の良さを見つけることにつながっているのだと思います。

そして講義では、自分が味わった地域の良さを記事にしていきました。相手の言ったことやその場の空気などを、読者に伝えるように書きます。この作業がとて大変でした。自分のなかではうまく書けていると思って、あらためて読んでみると、誤字や間違った表現が自分の記事から見つかります。ま

た友人に読んでもらったとき、けっきょく何が伝えたいのかが分からないという感想をもらいました。今回のテーマは都留の魅力です。私が伝えたいのは、取材のときに面白いと感じたことです。自分が感動したできごとを文字にして伝えることは、思っている以上に難しいことでした。

すべての講義が終わってから、お話をうかがった人のもとへ完成した記事を見せにいき、また今度お話をすることになりました。これまで編集という作業は、文を書くという印象が強かったです。けれど講義を通して、人との出会いやそのときの経験を大切にする作業なのだと感じました。

(なんじょう あらた・初等教育学科3年)

■地域交流研究教育プロジェクト■

「田んぼクラブ」―稲作体験実習の取り組み―

活動の曲がり角を迎えて

「田んぼクラブ」は今年度（2016年度）で12年目になる息の長い活動ですが、近年、なかなか新入部員が集まらないこともあって、学生中心の活動が難しくなっています。今年度の学生代表を務めた柴田富士雄さんに活動報告を書いてもらいました。いろいろな困難があるなかでも、活動に主体的に参加したメンバーは、それぞれに得たものが大きいようです。やはりこの活動は続けなければ、と思います。文末にあるように、今年度の学生メンバーに考えてもらったり、他の教員にも相談したりしながら、来年度の活動をどう盛り立てていくか検討中です。

■西本勝美

田んぼクラブでは、ここ十年ほどの間、無農薬でのお米作りを実施しています。そのため、田んぼの植生や、田んぼに棲む動物の種類も変化し、トノサマガエルなどの姿も見えるようになりました。ここ数年、大学内の農業関係のサークルの活動停止が相次いでおり、田んぼクラブも新入部員が少なくなっています。昨年の活動でも、サークルのメンバーだけでは作業に人数が足りなかったため、他のサークルなどから参加を募り、草取りや稲刈りのお手伝いをしていたできました。

現在メンバーに1年生がいないこともあり、来年の活動をどのように進めていくのか、先生方とも検討しているところです。

（にしもと かつみ・本学初等教育学科教員）

（しばた ふじお・社会学科現代社会専攻3年）

■柴田富士雄

私たち田んぼクラブは、地域の農家さんから大学近くの土地をお借りして、顧問の先生の指導のもと、ほぼ手作業で米作りをしています。田起こし・代掻き・脱穀はJ A（農協）や都留市内の農家さんのお手伝いをいただいています。育苗から稲刈りまでの作業はすべて自分たちの手で行っています。

種もみの芽出しは例年、学生代表が個人宅でおこなう作業なので、経験するのは今年が初めてでした。発芽させるための温度調整など、気を使うところの多い作業でしたが、大変さどやりがいを感じる事ができ

たのは良かったと思います。そのうち草取りで稲の葉にかぶれたり、稲花粉のアレルギーにかかったメンバーが居たりと、大変なこともありましたが、収穫を終えることができました。

今年は育苗の段階で苗の生育があまりよくなく、しっかりと育つのか心配でした。しかし天候のためか夏の間大きく成長し、収穫時には収穫量・お米の質とも昨年よりも良く、250キロほどの収穫がありました。

脱穀には市内の農家さんや、都留市の「地域おこし協力隊」の方にも協力していただきました。地域の方と連携して作業を終えることができ、皆さんに感謝しています。



十日市場湧水の年変動を捉えるために

■内山美恵子

都留市十日市場・夏狩地区は、平成名水百選に選定された湧水群がある場所として有名です。この湧水は1年間どのような変化をしているのかを捉えるために、2015年度より十日市場で湧水量の連続観測を行っています。2015年10月～2016年10月の1年間の観測結果では、湧水量は4月半ば～6月初めに最も多くなりました。また、その期間を除く2015年10月～2016年7月初めまでは同じくらいの湧水量で推移していましたが、7月初めから8月初めにかけて湧水量が減少し、8月以降は減ったまま安定しています。この変化は今年だけの傾向なのでしょう、それとも来年は違った変化を示すのでしょうか。なぜこのような変化をするのか、その要因を現在探っているところです。

この観測は、初等教育学科地学ゼミの学生に手伝ってもらいながら行っています。2016年4月から一緒に研究した感想を聞いてみました。

実際の経験を通じた学びの大切さ

■田村弥咲

今回は内山先生の水の流量観測の研究に参加させていただきました。具体的には実際に水の中に入り、流速を測ったり、水質を調査したりしました。さらにデータをパソコンに入力するといった作業も行いました。普段、小川や用水路など目にすることは多いのですが、なかなか意識したことがなく、とても良い機会となりました。また、観測のやり方など、多くのことを学びました。私はそういった知識がほとんど無かったのですが、内山先生に教えていただきながら作業に取り組みました。

レポート課題や教室での実験では学べないことだったため、良い経験となりました。実際に外に出て観察や観測をすることは、とても重要だと感じています。将来、教職を目指していますが、そういった実際の経験を通じた学びを大事にしていきたいと考えています。

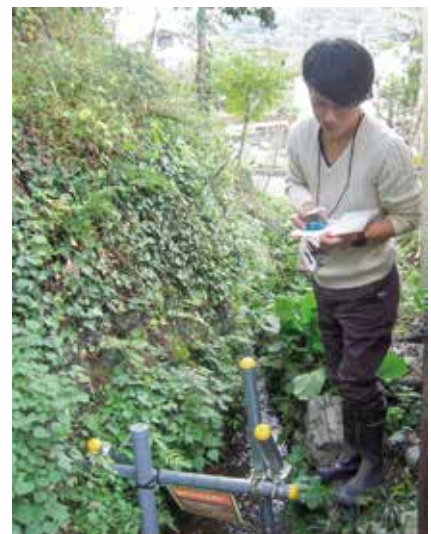
す。あまり深く考えずに、この観測に参加させていたが、想像以上に多くの経験と学びを得ることができました。

(たむら みさき・初等教育学科3年)

自分が知らない知識を得る面白さ

■竹川貴裕

流量観測の補助を経験して知ったことは、まず湧水は一年を通して水温の変化があまり無いということ。富士山の湧水は、夏は冷たく、冬は暖かくなるというふうには教えられていたので、実際に結果を見て、温度の変化があまり無いと知ったときは驚きました。また、観測した日毎に、流速や水深に変化が出ていたのはとても気になりました。天気の影響していることもあると思いますが、それ以外ではどのような要因で、流量が多くなったり少なくなったりするのかをもっと詳しく勉強してみたいです。また、永寿院の湧水は、



湧水の流速の測定。浮子が決まった距離を流れるのにかかる時間を正確に測定する



水質の簡易測定。身体より上流側で測定するのが鉄則

富士山の雪解け水なので、水源が同じ山梨側の湧水と静岡側の湧水には、水質に違いが見られるのかを比べてみて、似ているのか、そうでないのかを調べてみるのも面白そうだと思います。流量観測の補助を通して、自分が知らない地学の知識を身につけることができ、興味湧くことや、面白そうだと思うことを見つけてみたいし、こういった機会があれば、また経験してみたいと思います。

(たけかわ たかひろ・初等教育学科3年)

谷二ラボ

直径8cmと直径2mの地球・月・惑星

■ 山森美穂

今年度の「谷二ラボ」（〓谷村第二小学校で子どもたちと小学校教員を目指す大学生と一緒に理科実験をする活動）では、いままでとは趣を変えた、地球・月・惑星に関するテーマも取り上げました。

「あなたの生まれた日の地球〜ミニ地球儀をつくらう〜」では、子どもたちの生年月日をあらかじめ伺い、人工衛星からその日に撮影された地球の画像をラベル用紙に印刷したものを切り抜いて発泡スチロール球に貼って、それぞれが手のひらサイズの地球儀を作りました。早くできて、月や火星も作った子もいました。

また、「地球・月・惑星のおはなし」では、ダジック・アースという球状のスクリーンに画像を投影するICT教材を用いました。直径2mの大きな球が谷二理科室に出現！この回は、学生（4年生）による月の話に子どもたちが活発に反応していました。

今年度で谷二ラボは丸6年になります。ただ一人、1年生のときから欠かさず参加の6年生に、「いつも来てくれてたよね」と声をかけたところ、「だって楽しいもん！」。一番印象に残っているのは「砂糖水の虹」（2012年実施）、理由は「うまくいかなかったから」だそうです。これはとても考えさせられる一言です。

今年度参加した学生の声を紹介します。

「谷二ラボへの参加は5回目くらいになりますが、毎回違う企画を行うことで、実験教室の運営方法や子どもたちへの対応など、多くのスキルを身に付けることができています。『あなたが生まれた日の地球儀を作ろう』では、特に子どもたち1人1人の作業ペースの差が大きく、個別対応の難しさ・大切さを実感させられました。この経験を活かして、実験の楽しさ・面白さを伝えていけるような教員を目指していきたいと思います。」

（4年生）

「谷二ラボで実際に活動する事で、子どもとの関わり方だけでなく、理科実験に対する準備や運営の仕方もうが事ができました。小学校の教員を目指す学生が、子どもと直接関わることが出来る場となっているので、今後も積極的に参加していきたいと思います。」

（3年生）

「自分でも地球儀を作ってみて、子ども達に説明できるようにしておきましたが、子ども達の発達段階に合わせて子ども達に理解できるように言葉で説明することの難しさを改めて感じました。子ども達の作業ペースが一人ひとりバラバラで個別に対応することが難しかったです。出来上がった地球儀を満足げに眺める子ども達を見て、また谷二ラボに参加したいなと思いました。」

（3年生）

謝辞：今回の内容は、ダジック・アース (<https://www.dagik.net/>) プロジェクトに協力していただきました。

（やまもり みほ・本学初等教育学科教員）



直径2mの球に投影した「月」



「私が生まれた日の地球」作成中

食育つる推進市民会議活動

～市民会議と大学の連携による学生主体の食育実践活動の試み～

地域の方々と共に歩む食育教室

■ 平 和香子

初等教育学科生活環境科学系(家庭科)は、毎年、様々な食育教室を通じて、地域の方々と交流を深めています。この食育実践は、都留市が平成28年度から策定している「健康増進計画・食育推進計画」に基づき、市内における食に関する正しい知識の普及と、健康な食習慣の実践を目指す取り組みの一環として活動させていただいています。今年度は、本学調理実習室で行われた、都留市食生活改善推進員の方による、若者を対象とした減塩料理教室への参加と、昨年度に引き続き、さくら保育園(田野倉)に於いて食育教室を行いました。

(たいら わかこ・本学初等教育学科教員)

■ 佐々木新樹

平成28年12月15日(木)、調理実習室に於いて行われた「食生活改善推進員が教える減塩料理教室」に参加しました。最初に、都留市食生活改善推進員会長の小俣澄子様をはじめとする委員の方が、若者世代の食生活の問題点について、改善しなければいけない理由を教えて下さいました。次に、学生はグループに分かれ、直接食生活改善推進員にご指導をいただく形で、楽しい調理実習が始まりました。メニューはエビピラフ、スペイン風オムレツ、水かけ菜の白和え、オニオンスープ、フルーツヨーグルトの5品を約1時間30分で作りました。調理している際は、普段自分が使う調味料の量よりもずっと少なかったため、薄味に不安も感じましたが、実際に食べてみると素材の味が生きており、旨味も十分に引き出されていて、美味しいレス

トランで食べたような感覚になりました。また、こんなにしっかりとした味わいなのに、塩分量は全部食べなくても3.1gと少ないことに大変驚きました。

今回の体験を通して、塩分摂取量や減塩の調理法を学ぶことで塩分を意識するようになり、同時に食に対する意識が変わりました。今後、こうした料理教室などに積極的に参加したり、自らも積極的に若者の減塩の必要性を発信し、学生の食意識の変化につなげていけたらと思います。

(ささき しんじゅ・初等教育学科4年)

■ 申 玄社

今年度のさくら保育園における食育実践教室では、嫌いな食べ物を減らすための絵本による読み聞かせ、食べ物を大切にすることを伝えたペープサート、また

正しい箸の持ち方の指導を行いました。絵本による読み聞かせや、ペープサートでは、登場人物の役割を分担したり、歌を取り入れることで、園児の皆さんが興味を持てるような工夫を行いました。正しい箸の持ち方の指導では、箸の基本的な持ち方の説明から、スポンジと模型を使い、実践的な活動まですることができました。普段は、乳幼児に接する機会がないので、初めはコミュニケーションの取り方が分かりませんでした。園児の皆さんが進んで活動に参加してくれることで、とても楽しく食育実践を行うことができました。これからも、保育施設や教育機関と大学が連携しながら、子どもたちに食の大切さを伝えていけたらいいと思います。

(しん げんし・初等教育学科4年)



減塩料理教室の様子

学級づくりの向上をめざす実践講座を振り返って

鶴田清司

学級づくりの重要性が叫ばれるわりには、その具体的方法については学ぶ機会が少ないという現状をふまえて、平成24度から本講座がスタートしました。学級づくりの達人たちが、ご自分の実践を具体的に語って下さるのが最大の魅力です。また、学生にとつては、さまざまな問題をめぐって現職の先生方と率直に語り合うことができるという点でも貴重な学びの場になっています。

平成28年度は7回にわたって開催されました。参加者は109名でした。

- ・第1回 4月23日(土) 金勝武鑑(富士学苑中学校)
主権者教育のできる学級をつくり出せる教師集団に
- ・第2回 5月28日(土) 渡邊亜希彦(双葉中学校)
合唱活動の力を学級づくりから教科学習にまで生かす試み
- ・第3回 6月25日(土) 小尾 綾(明野小学校)
ともに学び関係性を築ける学級づくり〜特別支援の観点から〜
- ・第4回 7月23日(土) 高村文秀(東桂中学校)
「説得ではなく納得」担任・部活顧問として学んだことから
- ・第5回 9月24日(土) 上杉春樹(電王東小学校)
対人関係の問題解決能力を養うことに視点をのいた学級づくり
- ・第6回 10月22日(土) 小林恵子(電王西小学校)
日々できることをちよつとだけ増やしてみませんか〜児童理解を基本に〜
- ・第7回 11月26日(土) 鶴田 心(総合教育センター指導主事)
「生徒主体」につなげる信頼関係をどう築いてきたか

参加者の感想をいくつか紹介します

- ・見通しをもつということは、特別支援学級の子どもたち以外でも、とても大切だと思います。特別支援学級の子どもたちにしての支援は、他の子どもたちにも有効であるということに改めて気づかされました。(大学1年生)
- ・コメントや言葉かけひとつとっても、子どもの成長にとって大変重要なのだと感じました。私は実習で、授業で扱ったプリントにコメントすることがとても楽しみでした。発言できない子もきちんと思いをもって書いてくれて気づかされるが多く、それを見取り認めてあげることの大切さを今日のお話をお聞きして感じました。私自身、先生のコメントに励まされたり嬉しくなったりすることがあったので、私が先生になっても大切にしたいです。(大学4年生)
- ・自分の思っていることを素直に伝えられる子どもたちが素晴らしいと思いました。学力と学級経営、学習面と生活で切り離して考えるのではなく、一貫して指導することが大切であると考えました。(大学1年生)
- ・「小学校では何といつても授業」と言われるのを聞きますが、その授業に児童が向かうプロセスを見つめることによって、授業だけでなく生活時間の先生と児童のかかわりにも生かすことができます。また、学級通信が先生の児童への思いを口頭伝える唯一の手段だと考えていましたが、テスト採点時のコメント、自主学ノートへのコメントも保護者に伝えられる媒体だということを知り、生かせると思いました。(大学2年生)
- ・「説得ではなく納得」小学生のうちから、相手が誰であっても「ちがうと思う」「どうしてか言ってほしい」と言える子どもを育てたいと思っています。反抗心ではなく、まさに納得して物事に当たるために、その言える子に育ててほしいと考えています。(小学校教諭)
- ・生徒の考えを吸い上げる視点、とことん徹底して話し合わせる信念など、目的や目標を達成させるための手段として粘り強く生徒と関わり合うことの大切さを学ぶことができた。全員が納得できることが重要なのではなく、話し合うことで価値観や信頼関係を高め、深め合うことの大切さ、そこにねらいがあるのだと感じた。(小学校教諭)
- ・生徒が自分で見つけた答えだからこそ納得でき、行動につなげていくことができるのだらうと思いました。一方的な押しつけではなく、双方のやりとりから生まれてくるものを大事にしていきたいと思いました。(中学校教諭)
- ・言葉のもつ力の大切さを改めて実感しました。教師の発する言葉によって解釈が変わってくるのだということ意識して、一人一人が自己効力感をもてるようなかかわりをしていきたいと思っています。(中学校教諭)
- ・子どもを見取ることの大切さを今後にも生かしていきたいです。言葉で言うのは簡単ですが、一人一人の子どもの見取ること(その子の背景やどんなことを考えているのかなど)は本当に難しいことだと思っています。

しかし、子どもと真正面から向き合うということを今日学べたので、これからの生活の中で考えながらやっていきたいです。
(中学校教諭)

センス、感性という言葉でぼんやりしていたスキルが、とてもはつきりと分かり参考になりました。また、生徒のどんな自分も受け止めてくれるという安心感がとても伝わってきました。人として素直に真つ直ぐ向き合うことの大切さを改めて学び、目の前にいる生徒をより大切にしていきたいという思いが強くなりました。(中学校教諭)

連続して参加する人が目立ち、講座の内容に対して肯定的な感想も多い。参加者の幅をさらに広げるために、次のようなことを検討したい。
・これまで年7回、第4土曜に固定して実施していたが、月によって変える。(9月は小学校の運動会と重なる、10月は県教育研究会と重なる)
・2学期になると参加者が少なくなる傾向があるので、8月末に前半のふり返りと2回目の告知をする。

(つるだ せいじ)

本学初等教育学科教員

文大名画座 『シラノ・ド・ベルジュラック』

山口博史

この映画をはじめてみたのは、1990年代の半ばすぎだったでしょうか。日本での公開から何年かたっていました。解説もなにもなく、作品に直接ふれました。演技のすばらしさや映像の美しさ、そしてよく考えられたストーリーに魅了されました。しかし、私はフランス文学専攻というわけでもなく、映画が扱っている時代の背景についても当時はあやふやな知識しかなかったのが実情でした。この映画作品にはふかく心動かされたものの、はじめてみたときに作品の細部まで鑑賞できたかという点、心もとなかったといわざるをえません。

そのうち、この映画をなんどもみました。20年近くにわたりみつづけてきたものと思います。この作品をレンタルビデオ店でなんども借り出しました。また、DVDが最近再発されたのでさつそく買い求め、鑑賞する機会が増えました。鑑賞するたびにいろいろ発見があります。フランス語を少し勉強して、字幕とフランス語のセリフを比較対照しながら鑑賞していくこともできるようになりました。そして、フランス語のセリフが「アレクサンドラン」という詩形をもとにして構成されていることものちに知りました。作品中のそれぞれの出来事にはいかなる歴史的背景があるのかをさかのぼって調べてみることもしました。時代背景がわかると「なるほど」と新たに理解できることが増えました。この映画ひとつについて、長く「自習」をつづけてきたようなかっこうです。

文大名画座の当日に行なった解説は、私のこれまでのそうした「自習」の成果でもありました。当日は時代背景、なじみのない語彙、そしてアレクサンドランという詩形

などについてかんたんに解説をくわえました。本当は、話したいことがもつとたくさんあったのですが、時間の制限もあり、作品そのものからそれらを感じてもらおうこと、そして名画座に来てくださった皆さんの今後の楽しみのために、語らずにいたことが少なくありません。

そして今回の鑑賞でもまた発見がありました。アレクサンドランの解説をするさいに、私は手拍子でリズムを説明しました。それが身体に残っていたのでしょうか、映画の前半、劇中劇の始まる前に、観客が足踏みや手を打ち鳴らすなどしてアレクサンドランのリズムを刻んでいることに気づきました。うかつなことですが、今回の名画座のときまでこれに気づくことができませんでした。(ひそかな「大発見」に)驚くとともに、また映画の味わいが深まったように感じます。

『シラノ・ド・ベルジュラック』を、私自身、なおこれからなんどもみなおすことになるでしょう。まだまだ気づいていないことがあると思います。今後もうした細部をみきわめ、その背景について学んでいく機会にしたいと思わせるたいへんすばらしい映画です。この映画は文大の図書館に所蔵があります。

(やまぐち ひろし・本学COC推進機構教員)



脳・ストレス・姿勢・コミュニケーションと心理学

県民コミュニティーカレッジ

いきいきと幸せに生きるために…心理学のすすめ

中川佳子

9月17日、10月15日、11月19日、12月3日と4か月にわたって、大学コンソーシアムやまなしと本学地域交流研究センター共催の「県民コミュニティーカレッジ講座」が開催されました。いきいきと幸せに生きるために、心理検査やトレーニングを体験しながら、4回にわたって幸せに生きるための提言を行いました。

第1回は「脳と健康」と題して、山梨県の超高齢化社会の現状や認知症の症状を説明しました。また、実際に物忘れ検査を行い、認知機能を測定しました。さらに、TVを単に受動的に見るだけでなく、自ら積極的に、例えばこのようなセミナーに参加することで健康寿命を延ばせる可能性があることを解説しました。そして、健康寿命を延ばすために、食事や睡眠などの生活習慣を改善することや、外出やお話すること、運動、感動する経験をすることをすすめました。

第2回は「ストレスと健康」と題して、ストレスとは何か、ストレスと生活習慣病の関係を説明しました。また、ストレスがない状態もストレスであるため適度なストレスが必要ではあること。過度のストレスやストレスの認知度と心身反応に差があることが問題であることを説明し、ストレ

スチェックで現在の状況を確認しました。最後に、ストレス対処法（積極行動型・気晴らし型・否認型・回避型）を紹介し、どれかに偏るのではなく、いろいろな組み合わせでストレスを発散することをすすめました。

第3回は「姿勢と健康」と題して、良い座り方と悪い座り方の例を示し、正しい姿勢が身体の緊張やコリを和らげること。心身の安定を導くこと。筋肉の減少を防止することを説明しました。また、高齢者の転倒は死を招く恐れがあるため、現在の転倒リスクを評価し、転倒予防のための環境整備や筋力やバランスを強化するトレーニングをすすめ、実際に体験していただきました。

第4回は「コミュニケーションと健康」と題して、受動的な態度では学習は進まないが、他者との相互作用を通じてお話しすることが脳によい刺激となり活性化することを説明しました。また、言語に関する知能は高齢者でも衰えず、まだまだ伸びる可能性があるため、日常生活でコミュニケーションすることをおすすめしました。

これらの講座を通じて、いきいきと幸せに生きるための心理学からの提言を行いました。これら心理学のすすめを実行し、よりよい人生を送っていただければと考えています。

（なかがわ よしこ・本学初等教育学科教員）



県民コミュニティーカレッジの様子

日本文学から世界文学へ

—夏目漱石と多和田葉子の鉄道小説を読む—

野口哲也

今年度、都留文科大学はドイツより多和田葉子さんを国文学科特任教授として迎え、11月7日に特別講演会を開催しました。多和田さんはドイツ語と日本語にまたがる創作活動で注目されている世界的な作家です。この講演会の関連イベントとして10月11日・18日・25日の3日間、市民公開講座を開催し、多和田さんの小説の魅力を紹介しました。今年夏目漱石という国民的作家の没後100年にあたっていることもあり、ヨーロッパでの異文化体験を創作の契機とした2人の作品の中から、私たちが身近に親しんでいる鉄道や富士山を題材にした小説を取りあげることになりました。

第1回目は「夏目漱石と多和田葉子の異郷体験」と題して、2人の日記やエッセイからそのヨーロッパ体験の意味を考えました。世紀転換期（1900年前後）の世界の中心だったロンドンで人種の・文化的なコンプレックスに打ちのめされながらその苦悩を自らの文学論に昇華しようとした漱石に対し、多和田さんにとつてのドイツ語という環境は、やはり母語が崩壊していく危機的な状況でありながら、そのことが自由な創造への飛躍を可能にするきっかけとして前向きに捉えられます。

第2回目の「夏目漱石の鉄道と富士山―『虞美人草』『三四郎』」では、教師や学者という肩書きを棄てて本格的に職業作家に転身した漱石の長編小説を読み解きました。この二作では、日本の近代化を象徴する鉄道（汽車）と、日本人の伝統的なアイデンティティを支える富士山が、個性的で新しい表現によつて描かれています。それらがともに風刺やユーモアを含む視線によつて捉えられていることや、物語の展開（人間のドラマ）を運んだりと、移動のプロセスに境界線を引いて決定的な変容を示したりする小説の装置として用いられていることを解説し、単に日本（人）の将来に対して悲観していた知識人というイメージとは違った側面に光をあてました。

第3回目の「多和田葉子がやって来る―『ゴットハルト鉄道』『容疑者の夜行列車』」で取りあげた初期の短編には、富士急行と姉妹提携を結んでいるマッターホルン・ゴツタルド鉄道が登場します。そこでは、ヨーロッパの地図の中心に位置するスイスと極東の島国である日本が並べられ、国旗や富士山のイメージを自在に脱線させながら、凝り固まった「わたし」という枠組みを乗り越えていく主人公が描かれます。「夜汽車」と「容疑者」を掛け合わせたタイトルの長編は、「あなた」という主人公が、不思議な旅の末に「わたし」という一人称を手放した始発地点を思い出すという、眩暈のするような旅の物語です。（日本）か



市民公開講座の様子

ら〈世界〉への越境を促す特異な身体感覚・言語感覚に基づく人間像や表現をもし漱石が目にしていたら、などと楽しい想像も膨らみます。

多和田さんの講演会では、作家の生の声で極めてパフォーマンス性の高い朗読を楽しむこともできました。直後にはクライスト賞の受賞も報じられ、〈ホンモノに触れる〉ことをアピールポイントにしている国文学科としても喜ばしいニュースでした。

（のぐち てつや・本学国文学科教員）

「留学生と遊ぼう」

子ども公開講座

地域交流研究センターでは都留市内の小学生を対象に、子ども公開講座（放課後子ども教室との連携事業）を都留市教育委員会との共催で行っています。

平成28年度は3講座が開かれました。今回は留学生と子どもたちが各班に分かれて、さまざまなゲームを通じてふれあう「留学生と遊ぼう」について、講座をサポートした学生の感想を紹介します。

■ 川口優佳

留学生と小学生の子どもたちがうまくコミュニケーションを取りながら活動できるか心配でしたが、百人一首や一筆書きをしていく中で少しずつ会話が増えていたように思います。私の班は元気な男の子4人と留学生1人の班でした。ルールの説明をするときは思った以上に大変でしたが、皆が元氣よく楽しそうに活動できていたのでよかったです。

百人一首では自分の前にある札を覚えて取るという作戦を立てて助け合いながら真剣に取り組む姿が見られました。留学生も「難しいけどおもしろい！」と言ってくれました。本番では読まれる札をどんどん取っていき、取れた札の枚数は8班ある中で1番多かったです。そして、見事総合優勝もしてその時は皆で大変盛り上がり、とても喜んでいました。短い間でしたが楽しく活動できて良い経験となりました。

（かわぐち ゆか・初等教育学科2年）

■ 越川優花

今回の子ども公開講座は、子どもたちや留学生に楽しんでもらえるか不安でしたが、一緒にゲームをする中でいろいろ話せて、子どもたちと留学生でも話をしていて、盛り上がってよかったです。百人一首は、私自身もあまりやったことがありません。子どもたちや留学生には少し難しかったと思いますが、取れたら拍手をするなど良い雰囲気でした。一筆書習字では、チームで協力しチーム全体で楽しめたように感じました。近年、このような日本の伝統的な遊びをする機会がほとんどないので、留学生にとっても、子どもたちにとっても、自分たちにとっても、とても良い機会になったと思います。百人一首の説明などが難しかったり、うまくいかない部分や反省点も多いですが、とても良い経験になりました。

（こしかわ ゆうか・比較文化学科1年）

※子ども公開講座の様子は、地域交流研究センターのブログでも紹介しています。



留学生と遊ぼう（百人一首）



留学生と遊ぼう（一筆書習字）

「森の動物の不思議」

7月30日、都留市内の放課後子ども教室（6教室）が合同活動を行いました。都留文科大学の北垣憲仁特任教授による子ども公開講座「森の動物の不思議」です。子ども達が大学内で、大学の先生に教えていただく貴重な体験となりました。

今回の活動は、自然豊かな大学キャンパス、うら山周辺の散策でした。お天気も良く木々の葉が緑濃く鮮やかに見えました。まずはエゴノキの観察、「ネコノアシ」とも呼ばれる白い虫こぶを手に取り、虫こぶの中にアブラムシがたくさんいるのを見た子ども達は驚きの声をあげていました。

学内からうら山へ移動していると、ひらひらとちようちよが。北垣先生からオオムラサキの雌だねと。辺りを見渡すとエノキの木、オオムラサキの幼虫はエノキの葉を食べて成長しているんだよと説明を受けました。植物と生き物は共生しているんだなと感じました。

うら山に入ると少しひんやりとしてきました。子ども達が水分補給をしていると、北垣先生が低木の枝を10cmほどの長さに切って子ども達に渡してくれました。とても良い香りのする枝は高級楊枝になるクロモジだと。こんな身近にある植物が高級素材だということに驚きました。子ども達も枝を鼻にくっつけ、においを確かめ喜んでいました。次に葉の中央に黒い実のあるハナイカダの説明を受けました。すると、子ども達は目の色を変えて黒い実の葉を探し回りました。小川に流して

みると楽しそう。子ども達に自然の中には遊びの秘密がたくさんあることを知ってほしいと思いました。

最後に地域交流研究センターで、子ども達に感想発表してもらいました。それぞれの子どもも自分の好きな植物や生き物に出会えたようです。活動が終わっても地域交流研究センター内の展示に興味津々の子ども達は、モグラのはく製やネズミの頭の骨格を手に取り、いつまでも見てまわっていました。

自然を見渡して歩くと子ども達の心には不思議だなと感じることがいっぱい。子どもたちからは質問が飛び交いましたが、北垣先生が穏やかに一人一人に答えてくれ、とても良い体験ができました。ありがとうございました。

放課後子どもプランコーディネーター

田中 美佐緒（たなか みさお）
志村 智子（しむら ともこ）
竹田 ふみ子（たけだ ふみこ）



続ける力が心を紡ぐ
都留文科大学合唱団復興支援クリスマスコンサート

2016年12月17・18日、宮城県女川町立女川小学校、石巻市立大須小学校において、都留文科大学合唱団が、復興支援クリスマスコンサートを開催しました。

このコンサートは、本学同窓会宮城県支部の協力の下、2011年に宮城県で行われた復興支援コンサートに引き続き行われたものです。当時の模様は地域交流センター通信21号をご覧ください。東日本大震災の爪痕は、5年が経過した今でも被災地に残り続けています。「被災地支援」の意思を持ち続け、つなげていく合唱団の方々から今回参加した感想と被災地への思いを伺いました。



1日目、女川小学校での演奏の様子

「復興」という言葉を思う

清水雅彦

東日本大震災が起きた2011年の12月に、都留文科大学合唱団が宮城県で復興支援コンサートを持たせていただいたこと、その開催は大学同窓会宮城県支部の皆様のご厚意と強い実行力の上

に実現したことは、当時の報告で述べさせていただけました。あれから5年、2016年12月17・18日と宮城県を再訪し、女川小学校、石巻市大須小学校にてクリスマスコンサートを開催してまいりました。先輩たちから少しずつ聞いてはいた被災地の状況、その後のマスコミに報道される情報を合わせてみても、なかなか当地の現況を把握するには至らず、また現役メンバーの中には全国から学生が集まる大学らしく中学生の時に実際に被災した者があり、さらに今年大きな震災に見舞われた熊本出身の学生が居るなど、それぞれが深い思いの中で、しかし精一杯の笑顔を届けたいと歌わせていただきました。

宮城県同窓会支部の皆様には、本当にお世話になりました。どれほどのお時間と労力を費やしてくださったか……。しっかりとご準備の上での運営がされていたからこそ、今回聴いてくださった皆様がお喜びくださったのだと思います。宿泊施設の夜、多くのご同窓とともに肩を組み学園歌を歌うなど、現役学生にとっては「都留文科大学という歴史と伝統の中に、今自分が居るのだ」という、日頃思うこともない当たり前のことを実感した様

子でした。また演奏だけでなく当時の悲惨な状況を、また今在るそれぞれの方が抱えている問題を、ほんの僅かでも共有できたことは貴重なことであり、今後あらゆる場面で、より適切な言葉を発し行動することができると思います。こうした都留文科大学の真摯な姿に触れ、私としても都留の教員であることを誇らしく思いました。大学、そして同窓会のご支援に心より感謝申し上げます。

今回2日目の会場となった大須小学校は全校で12名という、来年3月の廃校が決まっている学校でしたが、当日は子どもからお年寄りまでが笑顔と涙を浮かべながら拍手を贈ってくださいました。また餅付き大会、交流会の光景は、地域を繋ぐ役割であり続けた学び舎の本来の姿そのままでした。そして都留文科大学が全国のそれぞれの地域を繋ぐ重責を担っていることを確信しました。

「復興」という言葉、これがマスコミによつて作られている面があることに気付かされた二日間、多くの感慨を与えてくれました。宿泊した自然の家のグラウンドには仮設住宅80戸がびっしり立ち並び、そこにまだ40を超えるご家族が生活していること、街中の学校であった大川小学校が、今は荒涼とした更地にぼつんと、しかし強い思いを訴えながらそこに在ること、戻らない現実がある中で歩まねばならない多くの方々に、少しでも寄り添うことをしていきたいと心から思います。

(しみず まさひこ・本学初等教育学科教員、

大学合唱団顧問・常任指揮者)

合唱の意義を考えた2日間

望月彩乃

私たち都留文科大学合唱団は、12月17・18日に宮城県女川町立女川小学校、石巻市立大須小学校に訪問し、復興支援コンサートを行いました。会場に向かうまでの道中、被災地の方が自らガイドになり被災時の様子を話してくださいました。だいぶ復旧が進んでいるとお話しされていました。だいぶ復旧が進んでいるとお話しされている状況に衝撃を受けました。実際にその土地に立って景色を見たとき、瓦礫は片づけられていてもここが以前と同じような空間に戻るのには、まだ時間が必要だということを直感的に感じ、震災の傷跡の深さを改めて思い知らされました。大学同窓会宮城支部の方々の案内で、大川小学校に視察もさせていただきました。時が止まったままの学校の悲惨さを目の当たりにし、しばらく動くことが出来ませんでした。

音楽では物理的な復興の支援はできませんが、合唱を通して地域の皆様に楽しんでもらいたいという気持ちを胸に、演奏に臨みました。この演奏会で合唱の素晴らしさを改めて実感しました。「花は咲く」を会場の皆様と一緒に歌ったときに、沢山の笑顔や涙を目にして胸がいっぱいになりました。地域の皆様と音楽を共有する時間を過ごせたことは、私にとって一生忘れられない経験となりました。

演奏会の直後、東北出身の団員が話した言葉が印象に残っています。「震災の直後は音楽を

楽しむ余裕がなかった。震災から5年を迎えた今年、宮城県の方々や沿岸に住まわれている方々に温かく迎えていただけで、有り難い。」その言葉の通り、たくさんの拍手やお礼の言葉をいただき、私たち自身が励まされました。地域の方々との交流から悲劇的な出来事乗り越えようという人々の意思を感じました。人々の気持ちの強さや温かさを肌で感じた2日間であり、この経験は何にも代えがたい財産となりました。

東日本大震災から5年が過ぎましたが、この出来事を風化させてはいけないと痛感しました。復興のための力が必要なのはむしろこれからののではないかと、被災地の今を見て改めて思いました。そういった意味でも今回訪問演奏の機会をいただき、良かったと心から思います。出来ることは限られているかもしれませんが、この課題と向き合い考えていきたいと思えます。そして、この経験を胸に私たち合唱団はこれからも歌い続けていきます。

(もちづき あやの・大学合唱団団長、
初等教育学科3年)



石巻市立大川小学校を慰霊する団員たち



2日目、大須小学校での演奏の様子

合唱団宮城県訪問について

—復興支援コンサートで得たもの—

川瀬咲衣花

今回、被災地復興支援コンサートとして宮城県に伺わせていただいたことを本当にうれしく思います。自分の大好きな合唱を通して復興のお手伝いができるというのはとてもありがたいことでした。このような機会をいただけたことにまずはお礼を申し上げます。

私は、震災が起きてから宮城県を訪れるのは今回が初めてでした。また、震災で被害を受けなかった私にとっては、被災地の方たちの悲しみや苦しみは計り知れません。そんな中で今回コンサートをさせていただけるということで、私たちにできることは何なのだろうかと考えました。そして、私たちにできることは合唱を通して皆さんに癒しや楽しむ時間、感動をお届けすることではないかと考え、練習に励み、演奏しました。

演奏を聴いて涙を流してくださいる方を見て、私自身も胸がいっぱいになりました。また、涙ながらに復興支援のためにつくられた「花は咲く」と一緒に歌ってくださいる方の姿は一生忘れません。この歌をもっと大切に歌わなければいけないと痛感しました。

私は関西の出身のため、東日本大震災で失ったものは何もありませんでした。復興が進むことを祈ってはいいても、自分にできることは何もないのだと、震災に対してどこか他人行儀になっていました。しかし、今回の演奏会や大川

小学校の視察を通して、そんな自分の考えを改めることができ、そして少しでも被災地の方に寄り添うことができたと感じました。被災地応援の演奏会でしたが、逆に皆さんの感動と、自分の考えを深いものにする経験させていただきました。将来、教員を目指すものとして、また一人の人間としても今回の訪問演奏の際、見て、聞いて、感じたことを伝えていかなければと感じました。合唱団のメンバーも歌を通して伝えていってくださることだと思っています。5年前の演奏会に始まり、今年の演奏会と、この復興支援コンサートがこれからも続いていくことと、被災地が少しでも早く復興することを祈っています。

(かわせ さえか・大学合唱団学生指揮者、
初等教育学科3年)



会場入り口に立てられた看板



合唱団員と顧問の清水雅彦先生(左端)

大学と地域の懸け橋として

地域のかたがたに大学をより身近に感じてもらい、大学の活動についてさらに深く知っていただくことや、地域のかたがたと大学生との交流を促進していくために設置されたこのサテライトも4年かけて地域に少しずつですが浸透しつつあるように感じます。

今年度はさらに多くのかたがたにサテライトの存在を知っていただき、サテライトが大学と地域のかたがたとの架け橋として機能していけるように活動を行いました。今回、活動を行なった学生から寄せていただいた感想を紹介します。

盛里地区での訪問演奏を終えて

滑川未来

平成28年9月25日(日)に、都留市立旭小学校の体育館において、盛里地区に暮らす高齢者を対象とした「高齢者ふれあいの集い」が開催され、邦楽部息吹が演奏を行いました。約50名ほどの観客を目の前に、『もみじ』や『荒城の月』、『ふるさと』など「なつかしい曲」をテーマに5曲を演奏しました。

邦楽部息吹は、箏、三味線、尺八の三種の和楽器を使って演奏を行い、文化祭での発表を中心に活動を



写真上：演奏の様子。
写真下：参加者に編み方を教える加藤さん(右)

■ 巖石亜紀

(ほろいわ あき・本学職員)

しています。最近では、都留市・三町商店街のイベントステージにおいて演奏を行うなど大学を出て演奏する機会を頂き、少しずつですが演奏活動の場が広がっています。

新メンバーにとって今回が初舞台でした。また今までになく多くの観客を前に、部員一同とても緊張しながらの演奏になりました。しかし「なつかしい曲」として年配の方にも馴染み深い曲を演奏したためか、客席から曲に合わせて手拍子や歌、温かい拍手をいただき、和やかな雰囲気の中で無事演奏を終えることができました。

出演のお話をくださった盛里地区コミュニティセンターの皆様、拙い演奏に最後までお付き合い合くださった参加者の皆様、この場をお借りして深く感謝申し上げます。和楽器の演奏をもっと楽しんでいただけるよう、今後もより活発な演奏活動に努めていきます。

(なめかわ みく・国文学科3年)

「編む」を伝える難しさ

加藤明香

平成28年8月24日(水)、まちづくり交流センターにてみんなの広場「リボンレイストラップ教室」を開催させていただきました。

リボンレイストラップは、リボンを編んで輪の形にし、ウッドビーズを付けたストラップです。今回は、もう一工夫、という事で編みあがりリボンにチャームやビーズをつけました。

参加者は、5名。リボンレイは編みはじめるところが一番難しいと思います。参加者のかたも同じように感じたようで、編みはじめは苦戦していました。私自身も、「編む」手順を正確に伝えることが難しく、途中戸惑ってしまいました。しかし、そこさえクリアしてしまえば同じ作業を繰り返すだけ。最初は、「こんなのできないわ」とおっしゃっていた方も、編み進めるにつれ手の動きがスムーズになっていったように感じます。

最後はチャームを付けて完成です。質感の違うパーツが入ることで華やかさがぐっとあがります。皆さん、「私はこれがいい」「これも付けて良いですか」と好みのチャームを選んで付けました。今回は、「編む」という行為の難しさを教えられたように思います。編むことで、二本のリボンから模様や形を作っていく。その行為は素敵なことだからこそ難しさもあるのだな、と感じました。

(かとう もえか・初等教育学科4年)

第12回地域交流研究フォーラム

Q-Uを活用した学級支援及び学校支援のあり方

平成28年12月10日(土)に本学2号館1階2102教室において「第12回地域交流研究フォーラム Q-Uを活用した学級支援及び学校支援のあり方」を開催しました。地域相談室と関わりがあり、実際にQ-U(稿末※参照)を活用した教育実践を行っている方々やその研究・普及活動に関わっている方々にお話をしていただき、また、参加者との交流を通して今後の相談室の活動について考える機会となりました。

■品田笑子

はじめに

現在、地域交流研究センター地域教育相談室の活動の中心は教育委員会や学校を訪問し、研修会を通して行う児童生徒の間接的な発達支援活動です。中でもQ-Uに関連した内容が大部分を占めています。全国で440万人以上の子どもたちに実施されているとのことですが、教育実践への活用となると学校によって温度差があるというのが実情です。実際に学校現場で効果的に活用している先生方のお話には、そこから抜けて出すヒントが必ずあるという思いでフォーラムをスタートしました。

Q-Uとはどんなものか

まず、浅川早苗先生(富士吉田市立富士小学校校長)にQ-Uについて説明していただきました。浅川先生はQ-Uを活用した学級経営をご自身でも実践されて来ており、山梨県外からも講師としてオファーがある方です。学級集団を子どもたちにとって居場所となる

望ましい環境に育成して行くためには、勘や経験だけでなく、観察法・面接法に調査法を加えて現在地を確認する必要性があること、そのためには集団成立の2条件(ルールとリレーション)の確立状態を把握できるQ-Uが役立つこと、どの結果をどう見たらよいかを簡潔明瞭にお話しいただき、参加者一同、次の実践報告を聞く準備ができました。

Q-U結果活用の実際

一人目の登壇者は原田美貴先生(都留市立旭小学校教諭・研究主任)です。Q-Uというと「かたさの見える学級集団(管理型)」とか「ゆるみの見られる学級集団(なれあい型)」などという学級集団の状態を把握するためのアンケートというイメージがありますが。しかし原田先生の学校は3人、5人という少人数の学級が多いため、Q-U結果を全教員が一堂に会して分析し合い、一人一人について観察情報や入学以来の経過を確認し合い、全教職員で支援に取り組む方向性を見いだすために活用されていました。ちなみにそ

の場には私も都留市現職教員学級経営サポート事業の一環として参加させていただいています(6ページ参照)。

二人目の登壇者は小山博史先生(富士河口湖町立立小学校教諭・教務主任)です。小山先生は4年前に研究主任としてQ-Uを導入されました。導入と活用のお手伝いを本相談室でさせていただきました。抽出学級を中心とした分析や授業参観を通してQ-U結果を活用した学級経営が共通理解され、全学級の実践に結びついて行った経過はとても参考になります。また、実際に学級状態を分析し、改善策を検討し、それを実施していくことで学級集団が育っていった事例を紹介



していただきました。これについては、参加者から現在の自分の学級と状態とよく似ていて今後の学級経営のヒントになったとフィードバックがありました。

三人目の登壇者は、藤原祐喜先生（甲州市立松里中学校教諭）です。藤原先生は、前任校（塩山中学校）の研究主任時代に、中心となって市全体で組織的にQ-Uを活用するシステムを作り上げられました。甲州市では「意欲的に学ぶ学級集団づくり」に力を入れおり、「K-13法簡易版（短時間でQ-U結果をもとに学級集団の現状を把握し、改善・発展のための対応策を検討する手法）」による分析を全学級で行い、結果をアタックシートに記入して市に報告します。対応策は、ルールの確立とリレーションの確立に分類され、冊子となつて学校に配付されます。Q-Uの結果を参考にした授業改善も行われていて、これらの取り組みは、教育委員会が作成した「甲州市Teacher's Note」というガイドブックにまとめられています。最初は、トッパダウンから始まった取り組みが今では現場から研修の要望が上がるなど、ボトムアップになって来ているという言葉が印象に残りました。

Q-Uを活用した子どもたちの発達支援に必要な連携

コメンテーターをお願いしたのは、Q-U開発者の河村茂雄先生の一歩弟子にして今や右腕の武蔵由佳先生（盛岡大学准教授）です。武蔵先生は、Q-U活用についての全国の情報をお持ちです。今回はその中からいくつかを紹介していただきました。

子どもたちの支援レベルには、全児童・生徒を対象とした一次支援、問題発生の兆候が見られる児童・生

徒を対象とした二次支援、問題を抱えた児童・生徒を対象とした三次支援の三つがあります。それぞれについてQ-U結果のどこを活用するのか、具体的な支援にはどのような方法があるのか、分かりやすく教えていただきました。三次支援の児童生徒を担任・委員会・縦割り班などに分類した一覧表にまとめて全校で共通理解し対応する方法、気になった子にいち早く対応する「立ち話面接」はとても参考になりました。また、全国のQ-Uの膨大なデータを一番目にし、実践情報を収集し、日々分析・研究されている武蔵先生だからこそ、その解説には説得力があり、私自身も大変勉強になりました。

フォーラムを終えて

参加者は多くありませんでしたが、その分、参加者同士の交流、参加者と登壇者との交流は充実したものになりました。Q-Uを活用した子どもたちの発達支援について多くのヒントが得られたことが参加者の感想からも分かりました。また、本相談室としても今後の方向性を考える上で大変ありがたい機会となりました。感想や当日の様子につきましては地域交流研究センターのブログをご参照ください。

最後に、学期末のお忙しい中、駆けつけてくださった登壇者の皆様と参加者の皆様、企画・準備から当日の運営まで支えてくださった鳥原正敏先生（地域交流研究センター長）及び事務局スタッフの皆様にご心より感謝を申し上げます。



※河村茂雄 現早稲田大学教授（前都留文科大学大学院教授）によって開発され、その後標準化された心理テスト。児童・生徒の認知をもとに個人や学級集団の状態を把握し、児童・生徒がよりよい学校生活を送るための支援に活用することを目的としている。（楽しい学校生活を送るためのアンケート：Q-U）は1998、「よりよい学校生活と友達づくりのためのアンケート：Hyper-QU」は2007、発行は図書文化社。）

（しなだ えみこ・本学COC推進機構特任教授・地域教育相談室担当）

●●編集後記●●

平成28年度の「地域交流センター通信」28号をお届けします。本センターは移転してからおよそ1年が過ぎました。新しいセンターは4号館の1階にあります。広く、明るく、居心地のよい空間です。ここには交流スペースをはじめ事務局とCOC推進機構、フィールド・ノート編集部があります。交流スペースでは「郡内織物手織り体験会」など、様々な企画が行われています。読者の皆さんも本学に御来校の折りに是非お立ち寄りください。

本通信の記事についてご紹介します。12月に都留文科大学合唱団が宮城県の女川小学校と石巻市大須小学校でクリスマスコンサートを開催しました。平成29年3月で東日本大震災からまる6年が過ぎます。しかし、今でも被災地には震災の爪痕が残っています。この時期に宮城県でこういった活動が行われたことはとても意義深いと思います(38～40頁)。

11月には「多和田葉子特任教授講演会－文学における文字と声－」(主催：都留文科大学)が開催されました。本センターでは、これに関連する事業として市民公開講座を開講しました。また、多和田葉子先生(国文学科)は2016年にドイツの著名な文学賞であるクライスト賞を受賞されました。これらの活動や出来事は、本学が地域における「知の拠点」であることを象徴するものであったと思います(35頁)。

12月に開催された、「第12回地域交流研究フォー

ラム-Q-Uを活用した学級支援及び学校支援のあり方」にもご注目いただきたいと思います。Q-Uについてはこれまで様々なところで語られてきましたが、本フォーラムではQ-Uについて県内地域で理解が着実に広まり、深まっていることが確認されました。教育に関する試みには長い時間と多くの方々の力が必要です。本センターはこういった地域の教育に関する活動を支援しています(42～43頁)。

フィールド・ミュージアム部門では、毎年「ムササビ観察会」を開催しています。この観察会はとても人気があり、近隣だけではなく東京などからも参加者があります。これを踏まえ、環境の保全と安全、近隣の方々への配慮といった観点から、本年度は「バスツアー」としました。我々は、今後も地域の環境を保ちながら、より多くの方にご参加いただけるよう工夫を重ねて行きたいと思います(23頁)。

本通信は地域交流研究センターの活動を読者の皆さんに身近に感じていただくことを目的としています。本センターの活動は多種多様です。本通信でお伝えしきれない活動の様子は「地域交流研究センターブログ」(<http://tsuruunv.sakura.ne.jp/subject/chikikouryu/>)でリアルタイムに発信しています。本通信に併せて、こちらもご高覧賜りたく思います。

(地域交流研究センター長 鳥原正敏)



絵・成瀬洋平(本学卒業生)

地域交流センター通信 第28号：2017年3月17日

編集：都留文科大学 地域交流研究センター・通信担当 (編集長・北垣憲仁 鳥原正敏 山口博史 品田英子 堤英俊 杉本光司 福島万紀 内山美恵子)

田中正樹 横田祐太郎 小林幸恵 巖岩亜紀

(C)発行：都留文科大学 地域交流研究センター

F 402-8555 山梨県都留市田原3-8-1 tel.0554-43-4341 (代)